

第5部
大宰府の客館と響銅



客館跡の発掘調査

第5部 大宰府の客館と響銅

第1章 新羅王子がきた時代	小嶋 篤	243
第2章 「西の都」大宰府と外交施設	井上 信正	247
第3章 輸入陶磁器と喫茶文化	井上 信正	259
第4章 大宰府出土の響銅	井上 信正	263
第5章 響銅でつながる大宰府と東アジア	川村 佳男	267
第6章 現代の鋳金作家からみた極薄青銅器	赤沼 潔	271

第5部では、大宰府の外交機能を取り上げ、とくに外交使節と饗宴に着目する。第1章～第3章では、平成26年（2014）に「特別史跡 大宰府跡」に追加指定された推定客館跡を基点として、時代背景・都市機能・国際交易を検討する。第4章～第6章では、饗宴でも用いられた響銅（佐波理・極薄青銅器含む）を基点に、文化交流・製作技術を検討する。

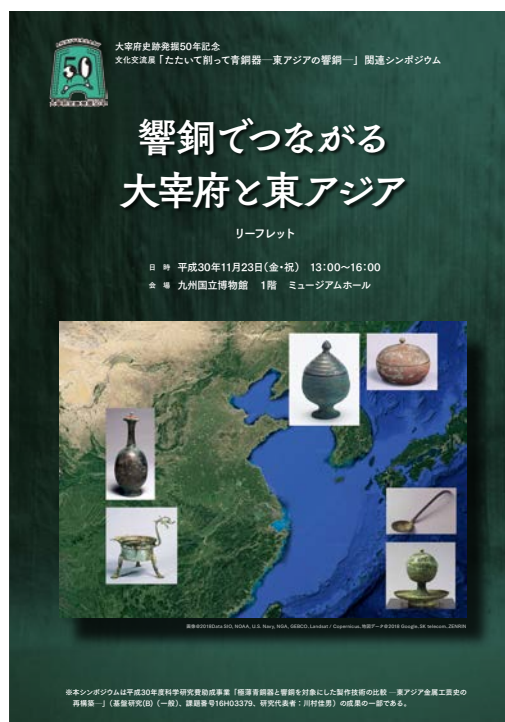
なお、第1章は、平成27年（2015）11月3日に、九州国立博物館・太宰府市教育委員会が合同開催した講演会「新羅王子がみた大宰府」の当日配布資料を再掲載（一部加筆）したものである。

第2・3章は、平成27年（2015）9月22日～11月29日に、九州国立博物館・福岡県・太宰府市教育委員会が合同開催したトピック展示「新羅王子がみた大宰府」解説図録を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。

第4章～第6章は、平成30年（2018）11月23日に九州国立博物館が開催したシンポジウム「響銅でつながる大宰府と東アジア」の当日配布資料を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。



トピック展示「新羅王子がみた大宰府」
ポスター



シンポジウム「響銅でつながる大宰府と東アジア」
当日配布資料表紙

第1章

新羅王子がきた時代

小嶋 篤

はじめに

平成27年に開催した九州国立博物館トピック展示「新羅王子がみた大宰府」は、太宰府市で新たに発見された推定客館跡を起点に構成した展覧会である（小嶋2015）。推定客館跡は現在の西鉄二日市駅の北にあり、古代においては太宰府条坊のほぼ中央に位置する。推定客館跡が造営された奈良時代（8世紀）を代表する外国使節団の一つに、天平勝宝四年（752）に来日した新羅使節団がある。本展覧会では、この新羅使節団の代表である新羅王子・金泰廉の足跡をたどることで、「古代日本と新羅の交流」や「古代都市・大宰府」の実像に迫っていった。

なお、推定客館跡は遺跡の重要性が認められ、平成26年10月6日に「特別史跡大宰府跡」に追加指定された。特別史跡は、国が指定する史跡のうち特に価値の高い史跡のみが指定されるものであり、「遺跡の国宝」と評するに相応しい。全国では、三内丸山遺跡や登呂遺跡等の61件が指定されており、福岡県には「大宰府跡」・「大野城跡」・「水城跡」・「王塚古墳」・「基肄城跡（福岡県・佐賀県）」の5つの特別指定史跡がある。

1. 白村江の戦い以後の日羅交流

日本と新羅は、661年（百済王子・余豊璋の護送）～663年（白村江の戦い）にかけて旧百済領内で戦火を交えたが、668年には互いに使節団を派遣して国交の回復を図った。同668年は、唐と長年の抗争を続けてきた高句麗が滅び、唐による東アジア支配がいよいよ現実味を帯びてきた時期でもあった。日本との国交を回復した新羅は、670年～676年にかけて旧百済領と旧高句麗領の支配権を巡って唐との交戦を繰り返した。唐と新羅の軍事的緊張関係は、696年の渤海による唐侵攻まで断続的に継続していく。

このように百済・高句麗滅亡後の東アジア情勢は、唐と新羅の軍事的緊張関係の下で推移していった。7世紀後半における日本と新羅の友好関係の背後にも、唐と新羅の軍事的緊張関係があったとみるべきだろう。日本と新羅の交流がいかに良好であったかは、7世紀後半～8世紀前半における両国の仏教交流からも推し量れる。白雉四年（653）に入唐した大唐学問僧は、持統天皇四年（690）に新羅使に送られて帰国した。そして、日本に法相宗をひろめた新羅僧の智鳳は大宝三年（703）に「日本の学問僧」として入唐を果たしている。とくに、新羅僧の審祥や智鳳の弟子である良弁（東大寺初代別当）がひろめた「華嚴宗」は、奈良時代の主流宗派として発展していった。「奈良の大仏」で著名な「国宝・東大寺盧舎那仏坐像」が華嚴宗の本尊であることから分かるように、聖武天皇が進めた鎮護国家は、新羅仏教界との交流の中で育まれてきたのである。

日本と新羅の交流に変化が生じたのは、旧高句麗領北半に建国された渤海の存在が大きい。新羅は渤海に対する唐への軍事的支援を通じて、735年に唐から正式に朝鮮半島（鴨緑江以南）の領有が認められ、朝鮮半島支配を確固たるものとした。そして、天平七年（735）に平城京に入京した新羅使節団による国号「王城国」改称の告知は、日羅外交の転換点となった。新羅を属国とみなす日本と従来の対日外交からの脱却を図る新羅の外交軌跡は、二国間を隔たる深い溝として永く横たわっていく。日本は天平一〇年（738年・147名）・天平一四年（742年・187名）・天平一五（743年・不明）に来日した新羅使

使節団に対して、いずれも入京を認可せず、大宰府にて放還する強硬姿勢をとった。新羅王子・金泰廉は、日羅関係が冷え込んだ天平一五年（743）から9年後の天平勝宝四年（752）に来日したのである。

2. 天平勝宝四年の新羅使節団

天平勝宝四年に来日した新羅使節団については、『続日本紀』に複数の記事が確認でき、日本側の関心度の高さを物語る。まずは、新羅使節団に関する記事の要所を絞って、宇治谷孟氏による現代語訳を列挙する（宇治谷1992）。

記事①（天平勝宝四年）三月二二日

大宰府が次のように奏上した。

「新羅の王子で韓阿飡（官位一七等の第五位）である金泰廉、貢調使で大使である金暄、および王子を送る使いの金弼言ら七〇〇余人が、七艘の船に乗ってきて、那の津に泊まりました」と。

記事②三月二八日

使者を大内（天武・持統両天皇陵）・山科（天智天皇陵）・恵我（応神天皇陵か）・直山（奈保山。元明・元正両天皇陵）などの陵に派遣して、新羅の王子が来朝したことを報告させた。

※夏四月九日 東大寺の盧舎那大仏の像が完成して、開眼供養をした。…（後略）

記事③六月一四日

新羅の王子金泰廉らが天皇にお目にかかり調を献上した。そして次のように奏上した。

「新羅の国王から、日本に君臨する天皇の朝廷に言上します。…（中略）…王子の韓阿飡の泰廉を遣わして、王に代る名代とし、使いの者三七〇余人を率いて入朝させ、その上種々の御調を貢進させます…（後略）」

この日、新羅の使者を朝堂で饗応し、天皇は次のように詔した。

「（前略）…前国王の承慶（孝成王）や大夫の思恭らは言行が怠慢で、常に守るべき礼儀を失ってきた。…（中略）…今後、新羅王の軒英（承慶の弟。景德王）は、以前の過ちを悔いて、みずから来朝したいとこいねがったが、国政を顧みなければならぬので、そのため王子泰廉を遣わして代わりに入朝させ、兼ねて御調を貢進するという。朕はこれを聞き大へん嬉しくよろこばしく、使者に位をおくり物を賜わる。」

また次のようにも詔した。

「これから後は、国王がみずから来朝して、直接ことばで奏上するように。もし代りの人を派遣して入朝するのであれば、必ず上奏文を持参するように」と。

記事④六月二二日

泰廉たちは大安寺と東大寺に赴いて、仏を礼拝した。

記事⑤七月二四日

泰廉らは帰途について、難波の客館に泊まった。天皇は勅して使者を遣わし、絁・麻布・酒や肴を賜った。

以上が、天平勝宝四年に来日した新羅使節団に関する『続日本紀』の記録である。まず、記事①から新羅使節団の規模と構成が分かる。また、三月二二日以前に新羅使節団が那の津に来航（大宰府と接触）していることが分かる。そして、記事③の六月一四日には、金泰廉が天皇（幸謙天皇）に奏上していることから、新羅使節団の入京が六月一四日以前になされたことが確認できる。三月二二日から六月一四日の約3ヶ月間には那の津から難波津にいたる旅程（瀬戸内海航路）も含まれるが、七〇〇余名の使節団は、約1～2ヵ月間も大宰府に滞在したと考えられる。加えて、記事③の六月一四日の入朝では三七〇余人しか記されておらず、残りの三三〇余人は大宰府に滞在し続けていた可能性もある。つま

り、諸外国の関門となった大宰府は、七〇〇余名の使節団を長期間受け入れる準備（「客館」等の施設建設含む）が事前になされていたと見るべきである。確たる証拠はないが、史上最大規模となった天平勝宝四年の新羅使節団の来日のために、水面下で日本と新羅の交渉が進められていた可能性がある。

記事③に見られる幸謙天皇の詔には、天平勝宝四年以前の日羅関係の冷え込みが反映されるとともに、新羅の対日外交姿勢の軟化に対する日本の歓迎姿勢が読み取れる。とくに、記事②に見られる歴代天皇陵への報告は、日本の歓迎姿勢を示す最たるものであろう。しかし、記事③にも見られる「新羅の従属」に固執する日本は、天平勝宝四年以降も新羅に対してさらなる強硬策を推し進め、天平宝字三年（759）の藤原仲麻呂による「新羅征討計画（兵士約40,000人の派兵計画）」の立案にいたった。

3. 東大寺と新羅使節団

天平勝宝四年の新羅使節団の記事に挟まれて、夏四月九日の東大寺盧舎那大仏の開眼供養の記事がある。上述したように、盧舎那仏は華嚴宗の本尊であり、新羅との関係が深い。華嚴宗は新羅王族の信仰も集めており、新羅王子・金泰廉も強い関心をもっていたと考えられる。実際に、金泰廉は記事④に大安寺と東大寺への参拝が記録されている。大安寺には、日本に華嚴宗をひろめた新羅僧・審詳が在寺しており、金泰廉も面会を果たしたとみられる。このように、新羅使節団の来日は仏教交流の側面ももつことがうかがえる（近藤2012）。

また、盧舎那大仏の造立は聖武天皇が推し進めた鎮護国家（仏教による国家守護・安定）を象徴する事業であった。聖武天皇が「盧舎那大仏造立の詔」を発した背景には、治世の中で直面した「長屋王の変（729年）」・「天然痘の流行（藤原四兄弟の病死）（735～738年）」・「大宰府での藤原広嗣の乱（740）」をはじめとした政情不安・人心の荒廃がある。加えて、735年以降は日羅関係の冷え込みも顕著となり、政情不安に拍車をかけた。このような状況を打破する目的で、鎮護国家が国策に採用されたのである。つまり、盧舎那大仏の造立がなった直後に入京した新羅使節団は、聖武天皇・幸謙天皇が進めた鎮護国家の成功を印象づける存在にもなっただろう。



写真1 トピック展示「新羅王子がみた大宰府」

4. シルクロードと新羅

新羅使節団の入京は、日本の外交戦略に迎合するだけでなく、多くの新羅物や唐物をもたらした点においても、日本の朝廷を歓喜させた。金泰廉一行は、来日時に大規模な交易も行っていたのである。新羅使節団の交易の実態は、正倉院御物の「鳥毛立女屏風」の下貼りに使われていた反故文書「買新羅物解」から判明する。新羅使節団は佐波理（白銅）をはじめとした新羅物だけでなく、唐の工芸品や東南アジア産の香料・薬品を大量にもたらした。これらの品目は、当時唐で取引されていた交易品のほぼすべてを網羅している（石井2003）。新羅は唐との友好関係を回復することで、東アジア交易を通じた経済活動をおおいに展開していた。総勢700余人にもなる新羅使節団には、対日交易を主目的とした商人も多く含まれていたと見るのが自然である。日本は、新羅使節団がもたらした新羅物・唐物を購入する対価として、綿や絶等の絹製品を支払った。対価として支払われた絹の綿は、大宰府との縁が深い品目としても注目できる。筑紫の綿は良質であることが知られており、『万葉集』336番にも「しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは著ねど暖かに見ゆ」と詠まれている。

つまり、唐物・新羅物を入手したい日本と良質な繊維原料を入手したい新羅は、国家間の対立とは裏腹に、経済活動においては限りなく利害が一致していた。海を越えたシルクロードは、遣唐使だけでなく、新羅を介しても日本へと繋がっていたのである。

5. 新羅国内の様相

上記では、新羅使節団派遣にいたる歴史と日本側の対応を中心に整理した。次に、新羅使節団の派遣を決定した新羅側の事情にも目を向けて見る。

752年の新羅国内では、新羅王・景德王を筆頭とした王党派（専制主義勢力）と、それに対抗する反王党派（反専制主義勢力）の対立構造が形成されていた（近藤2012）。王党派は貴族勢力の抑圧による王権強化と漢化政策を進め、周辺国に対する中華意識高揚の主体となっていた。これに対し、反王党派は交易（手工業製品（佐波理・毛氈）の輸出等）を通じて財源を貯えていたことが指摘されており、対日外交にも強い関心をもっていたと見られる。要約すれば、反日姿勢の王党派と新日姿勢の反王党派による政治的な駆け引きの一つに、752年の新羅使節団の派遣も存在したと見られる。

また、直接の要因ではないが、渤海の外交戦略も注目できる。渤海王・大欽茂は、親唐政策を進めるとともに、日本に対する遣使を積極的に行った。無論、752年にも渤海使節団の来日が記録されている。日本と渤海に南北を挟まれる新羅にとって、日本と渤海の動向も注視すべき事案の一つであった。

おわりに

トピック展示「新羅王子がみた大宰府」の展示物は、東アジア各国の動向や立場の異なる人々の思惑や祈りが幾重にも連なり、幾多の偶然を経て、九州国立博物館に集結した。それぞれの展示物に秘められた歴史を読み解くとき、古代日本と新羅の交流が実像を結んでいくのである。

参考文献

- 石井正敏 2003『東アジア世界と古代の日本』日本史リブレット14 山川出版社
宇治谷孟 1992『続日本紀（中）』講談社
小嶋篤 2015「総論 新羅王子がみた大宰府」『新羅王子がみた大宰府』九州国立博物館
近藤浩一 2012「景德王代・王子金泰廉の日本派遣と新羅国内政治」『京都産業大学論集』第45号 京都産業大学

第2章

「西の都」 大宰府と外交施設

井上 信正

はじめに

平成27年4月、太宰府地域の歴史を語るストーリー「古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～」が、大宰府跡をはじめとする19件の構成文化財とともに「日本遺産」として国から認定をうけた。日本遺産は国が進める地方創生・観光立国に対応した文化庁の文化財活用事業で、世界に発信し地域活性化を図るため、申請にあたっては、地域の文化財群を総合的に捉えるこれまでにない切り口（ストーリー）が求められたのであった。

この「西の都」という言葉。響きがよく、九州国立博物館ホームページにも「西都大宰府」などと使われている。ただ、大宰府は天皇が住まう都ではなかった。「遠の朝廷」「天下之一都会」とは呼ばれたが、ここを「都」だったとする記録はない。このため違和感を覚える方も多いかもしれない。

たしかに大宰府は本当の意味での「都」ではなかった。しかし大宰府の調査研究が進むにつれ、その姿は古代宮都とよく似ており、しかも宮都造営の動向が大宰府造営にも如実に反映されていることがわかってきている。

このことを後押しする、画竜点睛となる一大発見があった。大宰府条坊内の「推定客館跡」である（以下、客館跡）。この発見は大宰府の都市構造が古代宮都と基本的に同じであることを追認するものである。天皇不在ではあるが、正式な外交を行う大宰府には舞台装置としての「都」が必要とされたのだろう。こうした見解をもとに、大宰府を「西の都」として日本遺産に申請したのであった。

「西の都」の姿がどのようなものであり、いかに東アジアを向いたものであったか。ここでは大宰府の都市整備と歴史経緯をふまえ、客館の構造や機能、そして大宰府饗宴の場についても、類例をもとに推測してみたい。

1. 「西の都」の成立

大宰府の初現については諸説あるが、その名が『日本書紀』に現れるのは推古朝からで、百済僧来泊という対外機能に関わって登場する。当時は筑紫大宰とよばれ、のちに律令制下の大宰府に引き継がれた。大宰府は西海道九国三嶋の管轄と外交・軍事といった対外機能を担う特別な官司で、朝廷さながらの組織と機能を備えていた。その長官である「帥」は、天智朝以降は皇族（王）や重臣の赴任が相次ぎ、これがある意味継承するように、大宝以降は従三位・中納言クラスを前後する公卿（高位者）が赴任した。遷都にともなう旧都の留守官に同様の高位者任命例がみられるが、「遠の朝廷」（『万葉集』巻3-304）と呼ばれるように、天皇不在ながらも大宰府は朝廷そのものであった、という見方もできよう。

これと関連して、大宰府には他の一般官司にない大きな特徴がある。それは官司整備とともに、早くから本格的に都市整備が推し進められたことである。しかもそれは、日本の古代宮都の動向・造営契機と連動したことが垣間見える。

白村江敗戦（663年）を契機に太宰府地域には、水城・大野城・基肄城で構成される百済系都城を模した要塞ができた。筆者は、このころの遺跡が平野部にはみられないことを踏まえ、百済系都城の系譜、築城が敗戦後の有事である点、百済系瓦の出土等から、天智朝の筑紫大宰は大野城内に拠点をおりたと推測する。その後、天武・持統朝（673年以降）になると各国との外交も増え、有事から平時へと時代

が推移することで、拠点が麓や平野部に移ったとみている。大野城南麓の都府楼地区一帯には官衙が広がり、「久須評」（豊後国玖珠郡。当時は郡を「評」と表記）の付札木簡など出土している。南西麓の国分地区では、庚寅年籍（690年）に基づくとみられる戸籍計帳に関する木簡などが出土し（国分松本遺跡）、筑前国府等の存在がうかがえる、南東麓の三条地区でも7世紀の軒先瓦が複数採集されている（九州歴史資料館編『九州古瓦図録』柏書房 昭和56年、他）。おそらく大野城の登城路沿いに筑紫大宰や筑前国の官衙が築かれていったのだろう。

同じころ、平野部には古代都市・大宰府条坊が造営された。造営時の整地や条坊道路の側溝など見つかっており、飛鳥の都で使われた暗文土師器も散見される（飛鳥Ⅳ期）。このころ飛鳥では「新城」とも呼ばれた藤原京造営が進められていたが、筑紫でも、朝廷が派遣した使者に「新城を監^み」させている（『日本書紀』持統天皇3年（689）9月庚辰朔乙丑条）。用語の一致と遺構の広がりから、「筑紫新城」は大宰府条坊を指し、造営のきっかけは6年前の天武天皇の「複都制の詔」に端を発するとみている（『日本書紀』天武天皇12年（683）12月庚午条）。この持統天皇3年には、飛鳥浄御原令が發布され（6月）、筑紫では皇親の河内王が筑紫大宰の長官（帥）に赴任し（閏8月）、すぐに「監新城」が行われた（9月）。その後の人事を経て、飛鳥浄御原令制下の筑紫大宰府がスタートする。この流れをみると「監新城」とは都市の竣工に伴う監査だろう。このときの政庁はもしかすると藤原宮のように条坊中心部にあったかもしれない。この「筑紫新城」造営には、河内王前任の筑紫大宰帥・粟田真人が関わったとみられる（いわゆるⅠ期大宰府）。

粟田真人はその後、遣唐執節使に任命され、大宝2－4年（702－704）に渡唐する。唐の聖暦3年（700）3月6日勅（『唐会要』巻100）で日本が絶域とされた直後のタイミングで派遣され、かつ白村江敗戦後以来の画期的な遣唐使であるが、彼らが持ち帰った情報によって律令制の改革が行われ、また北の中心に宮殿をおく「北闕型都城」への転換を図り平城京遷都が実行されたとの評価がある。粟田真人は中納言として改革にたずさわり、和銅元年（708）平城遷都詔が出た直後、中納言兼任のまま再び大宰帥に赴任する。706年から、平城京造営の「百姓身役」とともに大宰府再整備の「筑紫の役」が始まっていたが（『類聚三代格』慶雲3年（706）2月16日格）、粟田真人の再赴任によって事業が本格化した。観世音寺造営督促の詔（『続日本紀』和銅2年（709）2月戊子条）や、御笠郡大領の「益城連」賜姓（同年6月乙巳条）は、それを裏付けるものだろう。霊亀元年（715）5月、次の大宰帥に平城遷都詔直後から造平城京司長官として活躍した多治比池守が任命された。このうち大宰府整備が完了したとみられ、彼は養老元年（717）2月に善政を褒賞され、また翌2年（718）は「筑紫の役」の終了に

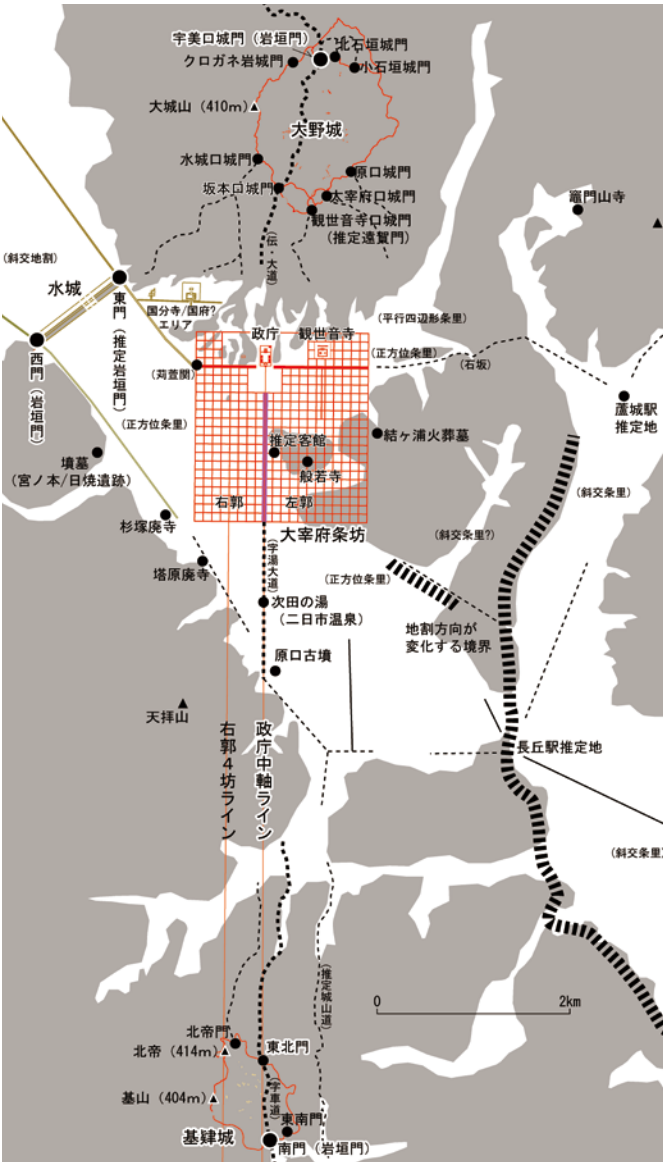


図1 大宰府都城図

伴い西海道の庸の全免が諸国並みに解消されている。こうして完成した古代都市・大宰府は、平城京に似た姿だったことが明らかとなっている（いわゆるⅡ期大宰府）。

このように、平城京と大宰府は、粟田真人や多治比池守らの指揮により、唐長安城に代表される東アジア都城制に基づく都市として誕生した。そうした中、二度も長官（帥）として大宰府造営に関わった粟田真人の動向は、遺跡だけではわからない時代背景、街や施設の設計理念や変遷をうかがう上で参考となる。

2. 「西の都」の姿

8世紀の大宰府は、天智朝築造の水城・大野城・基肄城を外郭（外城）とし、天武持統朝の条坊区画を利用して、「北闕型」に姿を変えたものだった。条坊と大宰府政庁・朱雀大路・観世音寺など主要施設とは配置上のズレが認められるが、これは天武持統朝の条坊が北闕型を前提としていないため、あらためて基準線や配置が設定されたものとみている。

大宰府政庁は条坊の北辺におかれ、建物は宮殿に類して配置された（朝堂院形式）。正殿は瓦葺礎石建ちの四面庇建物で、前には宮都大極殿前の龍尾壇に類する石敷きの高まりも備えている。その南は庭となり、東西両脇に2棟づつ瓦葺礎石建ち二面庇の脇殿を設けている。これらを回廊が囲み、南中央には門（中門）を設けた。回廊の北側は築地塀で囲って正殿の背後に後殿を設け、回廊の南側も築地塀で囲い南中央に楼門（南門）が設けた。南門の前は比較的大きな段差となり、その南は空間（広場）となっている。広場の中央西脇には4×10間の掘立柱四面庇南北棟があり、これを朝集殿とみる意見もあるが定かではない。この広場の東西には、大宰府の実務を行う官衙域が広がっている。

政庁の東は漏刻台が置かれたとの伝承がある月山（辰山）があり、周辺にも官衙と目される建物が点

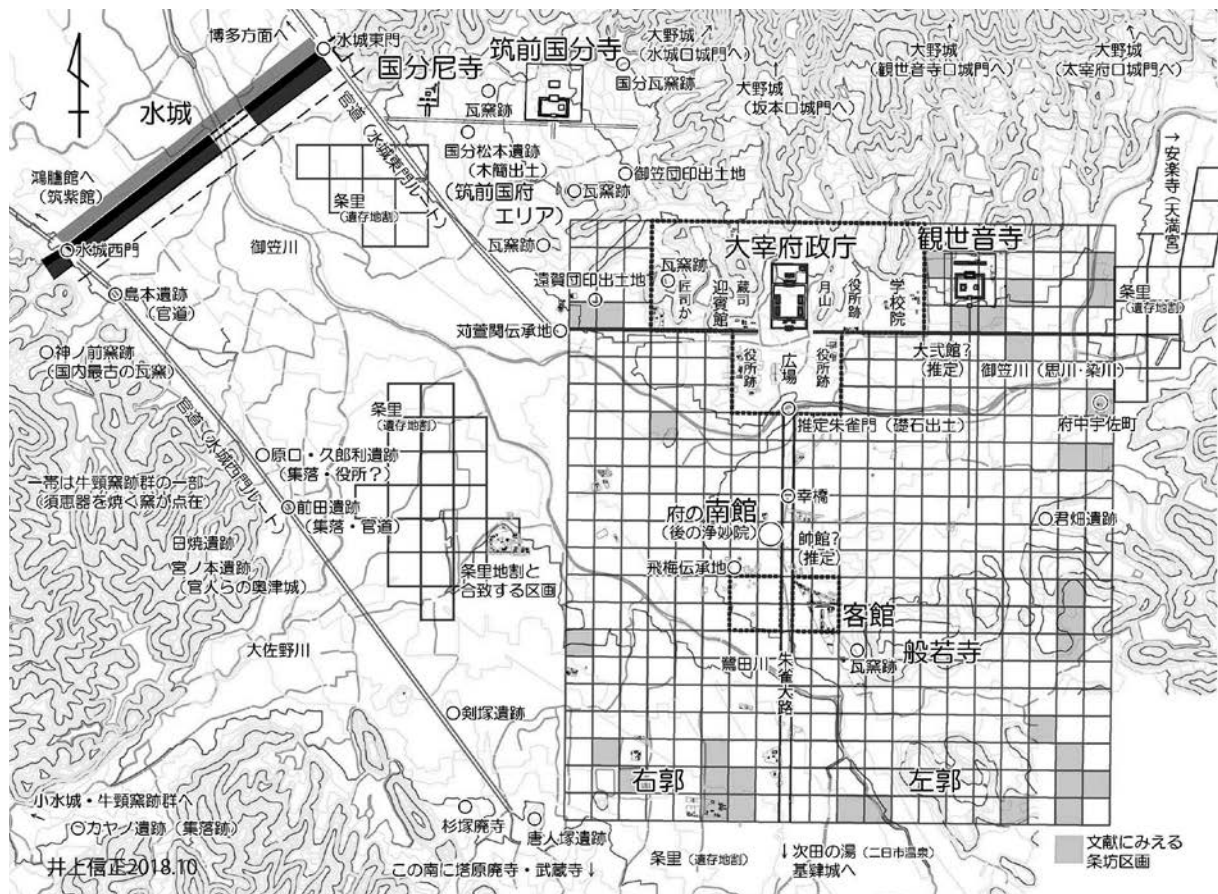


図2 大宰府条坊図

在する。さらに東は府学校（大宰府学校院）が設けられ、府の大寺・観世音寺と境を接している。政庁の西は蔵司と呼ばれ、丘陵上には政庁正殿より大きな巨大礎石建物跡の存在が知られている。近年の調査で、これは蔵跡ではなく南北二面に底をもつ正殿的な建物跡と判明した。この周囲から大量の鉄鏃・武具など採集されているが、建物や地下遺構との関係を示すものではなくその性格については謎が多い。この西側は金属工房跡・瓦窯跡が点在しており、匠司と推定されている。なお、政庁南門前広場の南の御笠川底から巨大な礎石が発見され、平城京朱雀門に相当する門があったと推定される（以下、朱雀門）。朱雀門より北が政庁・官衙域となるのは、宮都と同じ構造である。

このエリアを北に配すように、周辺にはグリッドプランの条坊都市が広がっている。条坊一区画は、史料では「坪」と呼ばれ、設計線に基づいて90m四方（250大尺・300小尺）となるよう区画された。その範囲は、考古資料と文献史料の一致から、南北22条、東側（左郭）12坊、西側（右郭）8坊と復元される（東西約1800m、南北約1980m）。条坊道路は幅5～8mほどある。「坪」を囲う築地塀の有無は不明だが、中は建物・井戸・土坑・小穴・整地が密度高く広がり、土器・瓦・金属製品・木製品等とともに出土する多種多量の国内外の陶磁器が、対外関係を司った大宰府の特徴を物語っている。

朱雀大路（郭心南北大路）は、朱雀門前から南に延びている。これは政庁に至る正式な道であり、平城京朱雀大路の1/2幅という、当時国内2位の広さをほこる大道だった。朱雀大路沿いには、大宰権帥として左降した菅原道真（845-903）が住んだ「府の南館」（現、榎社）や、大宰大貳・藤原高遠（949-1013）が和歌を詠んだ「幸橋」伝承地があり、後述する客館跡も並ぶ。大宰権帥・大宰大貳ら現地官長が着用した白玉帯（平安時代頃）の出土も集中している。朱雀大路南端の羅城門は未発見だが、おそらく宮都同様に設置されただろう。道はここからさらに南へ延び、万葉歌人として知られる大宰帥・大伴旅人（665-731）の和歌を伝える二日市温泉（次田の湯）に至る（『万葉集』巻6-961）。さらに南へ向かって登山道から基肄城東北門に至り、城内を南門（水門）へと進んでいる。これに沿って、「湯大道」（筑紫野市湯町）「車道」（基肄城内）という小字も残っている。都市中軸に沿った南北道は、平城京、また長安・洛陽といった中国の都城にもみられることから、これも粟田真人がもたらした中国系都城の一要素とみてよいだろう。

大宰府に至る官道も整備された。外国使節は、博多湾岸に設けられた筑紫館（鴻臚館）から水城西門一条坊南西端－羅城門と経由し朱雀大路に入った（水城西門ルート）。また都から赴任する官人は「大宰府道」と呼ばれた山陽道を通り水城に至るが、水城では境迎儀式が行われ（『大貳高遠集』『小右記』）、水城東門－苅萱関－政庁南門前の条坊路（四条路）と進んだとみられる（水城東門ルート）。都からは田河道（豊前方面）から米ノ山峠を越え、蘆城駅（『万葉集』巻4-568、8-1530、筑紫野市阿志岐）を経由して東から入る道もあった。筑後および肥前方面から大宰府に入る道は、基肄城付近を通っていた。基肄城内を通過する道（前述の東北門道や北帝門道）や基肄城東側の峠道があり、筑後守葛井連大成就が和歌に詠んだ「城山道」（『万葉集』巻4-576）との関連が指摘されている。豊後方面（南東）からの道もあり、長丘駅（『延喜式』、筑紫野市永岡が推定地）を経由し大宰府に入った。

これらの道を通じて大宰府には多くの人・物が集まった。都のように市が設けられたことも推定されており、鷺田川の南には「市ノ上」などの小字も残る。これが「人物殷繁、天下之一都会」大宰府の姿である（『続日本紀』神護景雲3年（769）10月甲辰条）。

3. 「西の都」の機能

以上、7～8世紀の激動のなかで誕生した都市大宰府を概観したが、その姿は「都城的」であり、藤原京・平城京といった宮都造営とも密接にかかわっていたことがうかがえる。ではなぜ大宰府に、都城機能を備える必要があったのだろうか。

その理由について白村江敗戦（663年）を契機とする有事（防衛）要因から論ずるものもあるが、天

武持統朝以降の整備は、要塞というより都城的であることが明らかとなった今、有事対応ではなく、むしろ平時の大宰府の役割をもとに構想されたと考えたい。

当時の都城には、礼制機能がそなわっていた。つまり、都城は生活の場であるとともに儀礼的な場でもあった。それは、北を上位として主従主客を示す方位や中軸線を重視するもので、互いにそのことを認知した上で、配列し挙動した。中国ではじまったこうした礼制は東アジアで通有するものとなり、内政・外交で機能し、都城・官衙はその舞台として整備された。このため7～8世紀の各国の宮都は、これに則った中国系都城（隋唐長安城）を国際標準モデルとしたとみられる。これを日本では平城京・大宰府が採用した。内政面は地方では国府が担ったことを踏まえると、大宰府の場合、内政的要因よりも外交舞台を備えるという意味合いの方が強いだろう。そうとみると、日本という国が大宰府という場所で外交を行うため、その舞台として礼制機能を備えた「都城」を設けた、と考えられる。このことを強く印象づけたのが、朱雀大路沿いに置かれた客館跡の発見である。

4. 推定客館跡の概要

西鉄二日市駅北側の操車場跡地一帯では、1万数千㎡にわたって埋蔵文化財発掘調査が行われ、数面にわたって建物・井戸・畑・区画溝などが展開しており、また多くの遺物が出土した。条坊区画も明確に検出され、道路の改廃や土地利用変遷の情報についての知見が増えるとともに、条坊成立期（Ⅰ期。7世紀末）の道路や区画溝も確認されている。

ここに展開する8世紀第2四半期から9世紀前半にかけての遺構が客館跡である。朱雀大路の東に隣接する左郭14・15条1・2坊の4坪を占有したとみられ（南北約170m、東西約150m）、西は朱雀大路、東は古代寺院・般若寺から延びる丘陵で区切られている。南の道路際には塀が設けられたことを示す痕跡があり、おそらく四周は遮蔽されていたのだろう。敷地南半東側（左郭15条2坊）には大型の掘立柱南北棟2棟が南北に並んで見つかった。北棟は身舎16×3間で西側に2間庇がつく（29.5×8.8m、約260㎡）、南棟は身舎が11×3間で同じく西側に2間庇がつく（23.6×8.6m、約200㎡）。この2棟は条坊内最大の建物で、政庁協殿に類する配置・規模を有した公的施設である。この西側は広い庭となっているが、さらに西側の朱雀大路との間に建物が存在した可能性もある（未調査）。大型建物群の東側には3×5間掘立柱東西棟2棟・倉庫等が配されている。性格は不明だが、客館管理の施設と推測している。

この一帯から、唐の陶磁器、新羅の佐波理・新羅土器、日本の奈良三彩、漆器などの国際色豊かな高級食器・容器が出土した。これらと条坊内の位置とが客館推定のきっかけとなったが、敷地北半（左郭

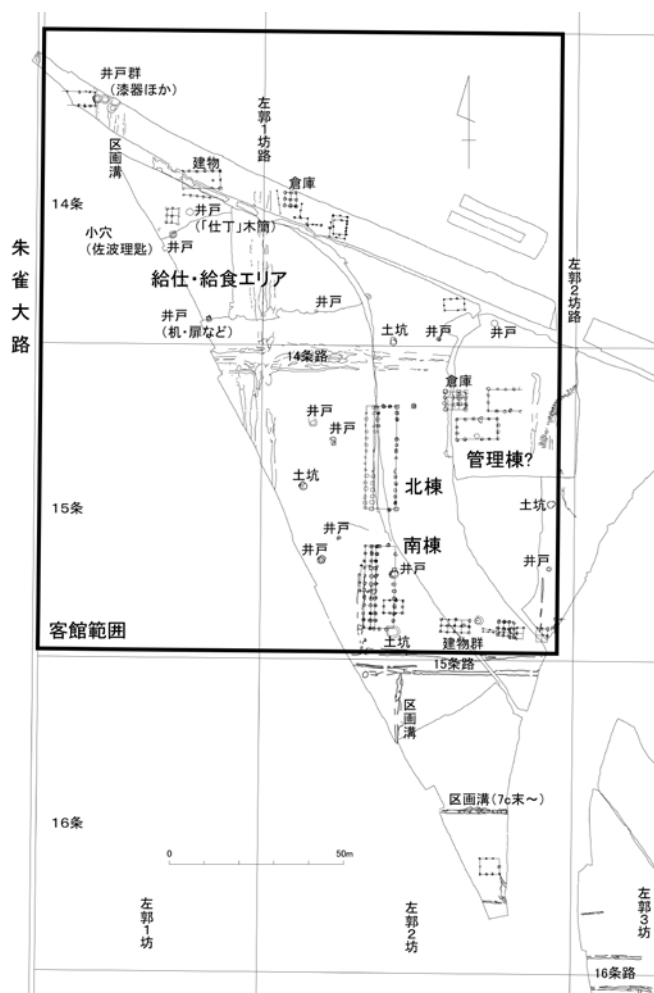


図3 推定客館跡主要配置図

14条)にこうした特殊品が集中する。奈良時代の井戸は条坊内でも事例が少ないが、数基まとまっており、給食・給仕に係るエリアとみられる。「仕丁」と記した木簡やその出役日数を記した歴名木簡なども、ここから出土している。

5. このころの客館事例

客館は、外国使節に宿泊・食事を提供した施設である。博多湾岸の鴻臚館跡が有名だが、畿内にも古くから難波津（大阪湾岸）に客館が置かれ、瀬戸内海を渡ってきた外国使節を安置した。難波館は奈良・平安時代にも引き継がれるが、このころ宮都の朱雀大路沿いに客館・鴻臚館が設けられたことが知られている。平安京鴻臚館は朱雀大路沿いの左右京七条に設けられた。平城京客館（『続日本紀』天平4年（732）10月癸酉条）は詳らかではないが、朱雀大路沿いに置かれた可能性が指摘されている（岸俊男1988）。

京の中央南北道沿いの客館は、唐長安城の鴻臚客館（皇城内、朱雀門と含光門の間）や、古くは北魏洛陽城の四夷館（朱雀大路の延長両脇と推定）などの例もある。北に坐す皇帝に至る南北道に客館を置くという形式は、礼制機能に基づくとみてよいだろう。つまり京内客館は中国系都城の一要素といえ、大宰府の客館もこの例に当てはまる。

ここで一つ、大宰府と比較されることもある陸奥国府・多賀城によく似た遺跡がある。多賀城城下の中央南北大路沿いの東西に大型南北棟が2列つつ並ぶエリアがあり、その東側東端には11×2間（33×6m）という城下最大の建物が南北2棟並んで見つかった（市川橋遺跡）。出土品に特筆すべきものがなく、倉庫・市・馬関連施設など推測されていたが、この遺跡は、都市内の位置、見つかった建物の大きさや配置のあり方が大宰府例と共通している。このことを踏まえ蝦夷饗応の客館説を呈示したところ（井上信正2010）、これを支持する意見も出ている（鈴木琢郎2013、鈴木拓也2015）。



図4 多賀城・市川橋遺跡（報告書より引用）

6. 客館の機能と構成

こうした事例を踏まえ比較検討することで、遺跡の理解をもう一步進めてみたい。客館の構造や使用のあり方を記す日本の史料・資料はなく、発掘調査が行われた博多湾岸の鴻臚館跡でさえこの時期（Ⅱ期）の建物はほとんどわかっていない。ただ、当時の日本が国際標準であった唐の賓礼（賓客をもてなす礼式）を導入し、その舞台として中国系都城を取り入れたのであれば、客館構造もそれに基づくことが想定される。

日本の京内客館が手本としたと考えられるのが唐長安城の鴻臚客館である。発掘調査は行われていないが、唐の賓礼を詳細に分析した石見清裕氏は、客館での儀礼復元にあわせてその内部構造の一端を示された（石見清裕1998。以下、唐の賓礼復元はこれによる）。それによると、鴻臚客館の正門は北門であり、客館内には階段で上がる建物があったようだ。面白いことに、館の主人は鴻臚客館に入った外国使節（蕃主・蕃使）であり、皇帝の使でさえ客人であったという。それを示すのが、ここで行われた唯一の儀礼、「皇帝が使を送り蕃主（蕃使）と対面する日を伝える儀礼」である（『大唐開元礼』『皇帝遣使戒蕃主見日』）。

鴻臚客館の北門から入った皇帝の使は階段を上って建物に入り、西側に立って、東の外国使節と東西で対面した。唐では、東西南北の方位は儀礼と深く関わっており、相手と対峙する方位とそこでの所作（礼のあり方）が問題とされた。外交の場ではこれは国際的な立場・面目につながる大事となるが、その舞台の一つである鴻臚客館では、主従関係で南北に向き合うのではなく、東を主人、西を客人とする主客関係で対面が果たされたのだ。それが客館に必要とされた礼制機能であれば、この東西対面は、客館施設の空間構成を考える上で重要な要素となる。

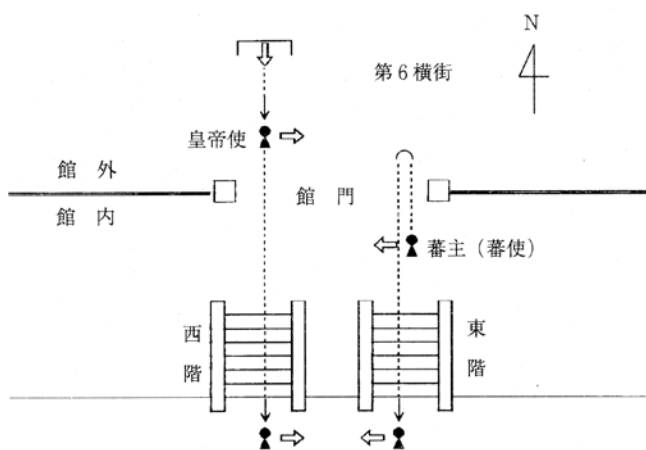


図5 唐鴻臚客館「皇帝遣使戒蕃主見日」儀式概念図
(石見清裕1998より)

石見氏は、両使が建物に入る際の「東階」「西階」を一つの建物（おそらく東西棟）に設けられた二つの南北方向に向く階段とみて、この中で主客が対面する想定図を示された（図5）。ただ、これを東西に向きあう2棟の建物があるとみて、それぞれの階段を上って対面したという解釈も可能だろう。互いの距離の問題はあるが、ここが礼的空間であればこそ、施設配置もそれに基づいたのではなかろうか。

この想定は、見つかった客館跡の建物配置をよく説明できる。

検出された2棟の大型南北棟は、敷地の東側に並んでいる。また西側は朱雀大路まで十分空間があり、そこに多賀城例のように南北棟が並んでいる可能性はあろう。儀礼で建物を使用したかどうかはわからないが、中央の空間を利用して対面儀礼を行うことも十分可能である。

なお、大宰府例・多賀城例いずれもこれら南北棟に見合う大型東西棟をもたない。官衙や邸宅では、一般に主殿・正殿としての東西棟（通常、北に配置）が設けられるが、それが無いということは、ここが上下主従関係を確認する場、つまり正式な外交儀礼の場ではなかったことを示している。

このようにみると、検出された南北棟群は東側にあるため、客館の主人たる外国使節が入る主殿と想定される。二間庇と荘厳されているのもその故だろう。8世紀末になると、このうち南棟が先に廃される。廃された理由は不明だが、北棟が残ったということから北の優位性を読み取ることもできよう。唐の鴻臚客館の賓礼でも北を上としていることを踏まえると、使節の長となる人物は北棟に入ったと想定される。

次に門を考えてみよう。本史跡では推定される門の位置に調査が及んでおらず未確認ではあるが、宮都がそうであるように門が朱雀大路（西側）に開いていたとは考え難い。東側も丘陵であり、南北棟という建物配置からも、東西には門はなかったと想定するのが自然だろう。加えて、鴻臚館跡（福岡市）では東門のみが確認されているように、隔離施設でもある客館に門は複数必要ない。少なくとも正門は南北いずれかと想定されるが、唐の鴻臚客館例から北門を正門と仮定すると、敷地の奥側となる南半に中枢建物があり、門に

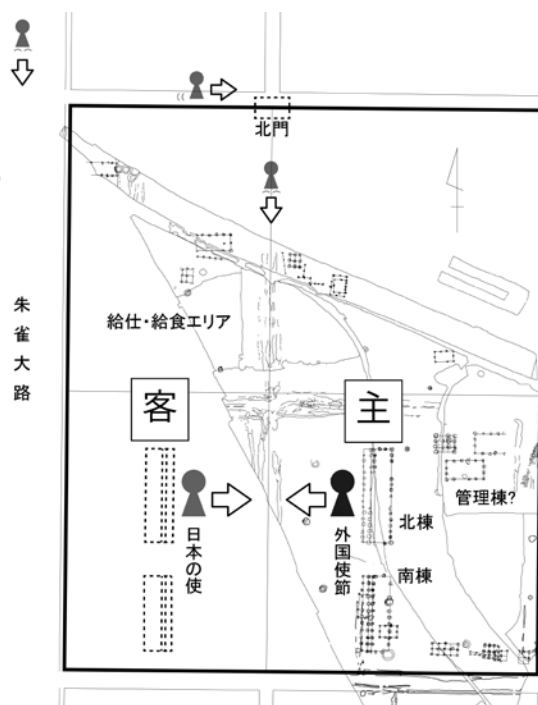


図6 客館跡の建物配置推定

近い北半が給仕施設に利用されている状況は説明しやすい。また、中国では皇帝の所有物は北に置くという考え方があるそうで（石見氏のご教示による）、大宰府であっても提供するものは天皇が供給するものとみなされるならば、北の給仕施設も一理あるといえる。

北に正門や給仕機能を持たせることなど通常の官衙施設では考えにくいだが、北闕型都城の礼制機能を考えると、宮殿・政庁から出向くための門は北門でなくてはならず、南門からの出入りは外交問題にもなりかねない。となると、それに合わせた客館内の建物配置がとられることに蓋然性を感じる。

このようにこの施設の特徴を、巨大で荘厳な南北棟を備えること、一般的に設けられる主殿的な東西棟を持たないこと、中枢が敷地南にあること、とみたが、それは唐の鴻臚客館構造復元と親和性が認められた。推測も多いが、国際標準だった京内客館の構造がここに採用されたと想定する。

7. 外交儀礼と饗讌の場

さて、高級な出土品の数々は、客館でのもてなしを推測させる十分な証拠となっているが、正殿的な東西棟がないことから、ここは正式な外交儀礼・饗宴を行う場ではなかった。その場はやはり大宰府政庁一帯であろう。

大宰府政庁は客館跡の約1 km北にある。客館を出た外国使節は、幅広い朱雀大路をおそらく隊列を組んで北進し、朱雀門－政庁南門－政庁中門と進み、政庁正殿前の庭で外交儀礼に臨んだと想定される。仮に唐の皇帝謁見儀式が参考にできるなら（石見清裕1998）、外国使節は正殿に対して南西側におり、東面あるいは北面し、儀式に臨んだと想定されよう。

使節が入京しない場合でも、大宰府で饗応し帰国させた記録は複数ある。また「大宰府に召す」とあることから、大宰府が直接やりとりすることもあったとみられる。さらには、外国使節が持参した国書を開封するようになる大宰府だが、基本的には、外交の主たる部分は朝廷（国家）が使者を派遣し執り行ったとみるべきだろう。大宰府官司が担ったのは、外交の一場面となる「饗讌」（饗宴）であった（養老職員令）。

この饗宴は、宮都では宮内で行われている。ただ、儀式と饗宴とでは場所を変えており、平城宮では大極殿閣門や南苑で、平安宮では朝堂院の西側の豊楽院で行われた。唐長安城でも、大宝の遣唐使・粟田真人が大明宮で受けた饗宴は、宮域西側の麟徳殿で行われたことが知られており（『旧唐書』巻199東夷伝）、外交儀礼の場ではなかった。こうしたことから、大宰府での饗宴の場も政庁とは異なる場所だったことが推測される。

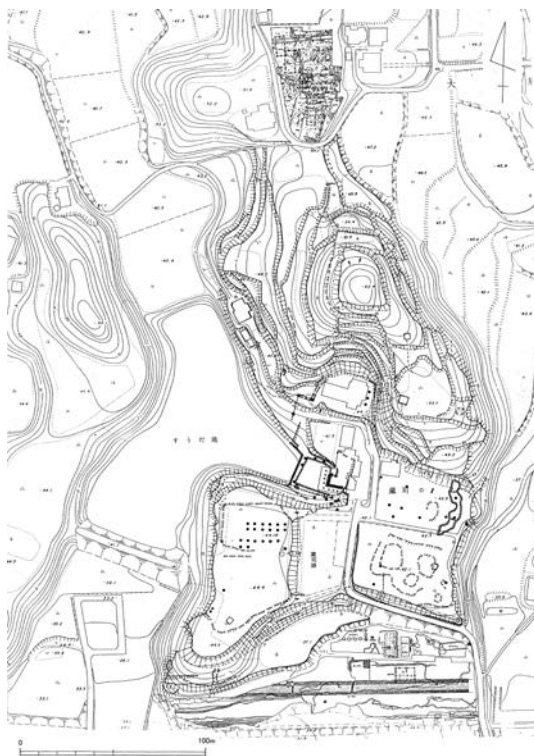


図7 蔵司丘陵 地形図



図8 蔵司丘陵 大型建物周辺地形図

ここで注目するのは、大型礎石建物が見つかった政庁西側の蔵司丘陵である。この丘陵西端にある大型礎石建物跡が蔵ではないことは建築史の研究者からすでに指摘があったが（澤村仁1998年）、調査を行っている九州歴史資料館は2014年秋、身舎9×2間、南北に各1間の底をもつ官舎建物と公表した（東西9間、南北4間）。これで蔵説は否定されたが、政庁正殿（東西7間、南北4間）と比べると、南北（梁行）はほぼ一致し、東西（桁行）は2間上回る壮大な官舎ということが明らかとなった。見晴らしのきく丘陵上という立地からも、大宰府にとってかなり特別な施設だったにちがいない。

筆者はこれが、大宰府の饗宴施設ではないかと考える（井上信正2010）。ここで唐での饗宴儀礼「皇帝宴蕃国使」と饗宴施設の事例を参考に検討してみたい。

石見氏の研究によれば、皇帝が饗宴の場となる殿舎に出御し、北坐し南面すると、蕃国使（外国使節）は、建物の階段下（南）から昇殿して西に坐し東面した。使節の配下は昇殿せず、その後ろ（西側）で東面した。

このことを唐長安城大明宮の饗宴施設に当てはめてみよう。

麟徳殿は大明宮内の西端にある。皇帝が私的に利用する殿舎であり、栗田真人が皇帝・武則天の饗をうけたことが知られるように饗宴施設でもあった（『旧唐書』巻199東夷伝）。ここは発掘調査が行われ、前殿・中殿・後殿の三殿からなる巨大な建築物だったことが知られている（図10）。そこで饗宴儀礼の復元を麟徳殿に当てはめてみると、西側に空間を有する前殿を皇帝が出御し外国使節が昇殿した建物とみることができよう。前殿は、東西9間、南北4間の主空間をもつ東西棟であり、大きさなど違いはあるものの、蔵司大型建物と同じ柱間である。また遺構図や復元図をみると、麟徳殿前殿の周囲を巡る空間はさほど広くなく、回廊のほか目立った建造物もみられない。つまり饗宴の場が主殿たる東西棟と多少の庭で構成されたのであれば、蔵司丘陵の大型建物とその周囲の空間で十分機能する。蔵司の大型建物前面空間の西南隅では、溝2条が平行しL字に曲がることが確認されているが、これは空間を画する回廊遺構の可能性もあろう。現在も調査が進められているが、こうした観点からの検討を期待したい。

8. 筑紫館との関係

大宰府におかれたもう一つの客館、すなわち博多湾岸に設けられた客館の遺跡が、史跡・鴻臚館跡（福岡市）であ

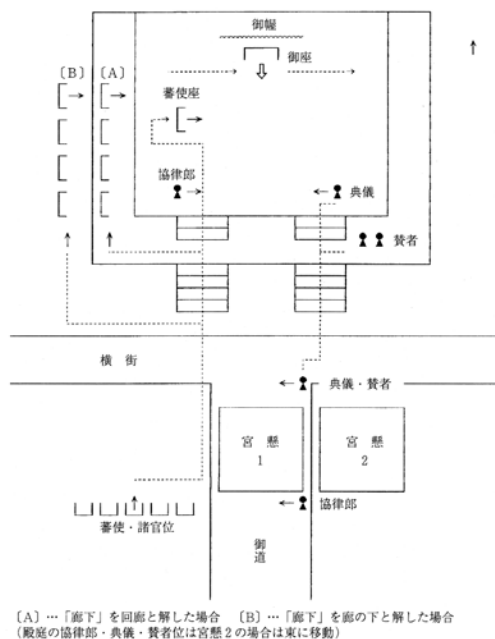


図9 唐「皇帝宴蕃国使」儀礼概念図
(石見清裕1998より)

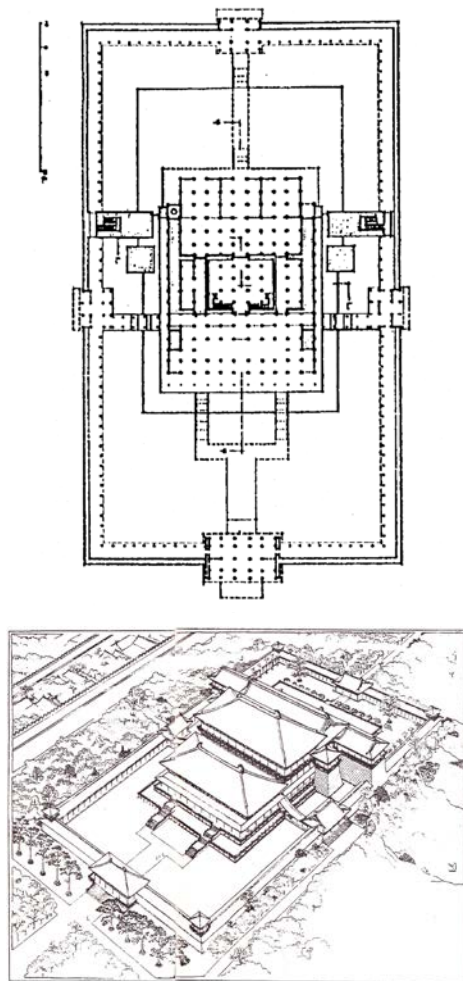


図10 唐大明宮麟徳殿 平面図(上)・復元図(下)
(劉到平・傅熹年「麟徳殿復元の初步研究」
『考古』1963-7より。一部改変)

る。交易が中心となる9世紀中頃以降は「鴻臚館」と呼ばれたが、外交が盛んな7～8世紀は「筑紫館」と呼ばれ、古代日本の外交・交易の玄関口であった。ここは外国からの使節だけでなく、遣新羅使（『万葉集』巻15）や、唐からの帰国者（円仁『入唐求法巡礼行記』ほか）の利用など伝えられている。



図11 鴻臚館跡Ⅱ期（筑紫館）の復元（福岡市教育委員会）

鴻臚館跡の調査では、7世紀末から11世紀にわたる5期の遺構が確認された。このうちⅡ期（8世紀前半）・Ⅲ期（8世紀後半～9世紀前半）が大宰府条坊内の客館跡と同時期となる。ここは、谷をはさんで同一規格の北館と南館が設けられ、東門（八脚門）を正門とした。北館の北側には築地塀もめぐらす。Ⅱ期は各館とも塀で囲われるが（南北約56m、東西約74m）、残念ながら建物は確認されていない。Ⅲ期はともに拡張され、回廊が大型の礎石建物（南北棟）を囲んでいる。

筑紫館は日本の窓口であった。このことは、日本を訪れる外国使節はまず筑紫に入るよう要請されていたことから理解される（『続日本紀』宝亀4年（773）6月戊辰条）。使節が来着すると、大宰府は所持品（交易品）や容貌などを付して朝廷へ報告する。すると中央から使者が派遣され、来日理由を尋ねた。このうち入京が決まると、使節は筑紫館を発ち、難波館を経由して京の客館（鴻臚館）に入った。一連の外交日程を終えると、再び筑紫に戻り、風待ちをして帰国の途についたとみられる。

筑紫館は大宰府の海辺の客館でもあった。既述のように、外国使節は筑紫館から水城西門を経由して、大宰府に入った。大宰府で外交日程を終えると、筑紫館に戻り、帰国したと復元される。

筑紫館と条坊内客館との関係は、難波館と京内客館との関係に比定され、両者がともに機能したのだろう。なお条坊内客館の北棟は260㎡、南棟は200㎡程度であり、数百人規模の受入は困難である。実際に大宰府へ入るのは使節の一部で、他は筑紫館に滞在したと推測される。これらの客館は遣唐使などの利用も想定されよう。

9世紀中ごろになると、国内の外交関連施設の廃止が相次ぐ。難波鴻臚館（難波館）、平安京東鴻臚館、そして条坊内の客館も終焉を迎えた。このころすでに新羅使は来なくなり、来訪するのは渤海使と商客だけで、外交よりも貿易に主体が移っていった。鴻臚館跡でもⅣ期（9世紀後半）から海外の多種多様な陶磁器類が大量に出土するようになり、外交のあり方の変質がうかがえる。

おわりに

大宰府の外交・饗応のスタイルは、都と同様、東アジアの国際標準に則ったものだったと考え、それを行う舞台として条坊制都城が備えられたとみた。そして同時代の類例と比較することで、大宰府の客館や迎賓施設に関する所見を述べた。平成27年（2015）に九州国立博物館で開催した『新羅王子がみた大宰府』展でも使用したイラストは、この検討をもとに下図をおこし、毛利清隆氏にイラスト化していただいたものである。

大宰府の都市や施設が明らかになるにつれ、古代日本がいかに東アジアを向き、筑紫を重要視していたかがわかる。ただ、外交・交易自体、莫大な費用がかかるものである。これを支える意味でも、大宰府には都市機能が必要だったのかもしれない。

「西の都」大宰府。それは東アジアとの交流のため古代日本がもうけた一大都市であった。

参考文献

- 岸俊男「遺存地割・地名による平城京の復原調査」『日本古代宮都の研究』岩波書店1988年
- 橋本義則「平安宮草創期の豊楽院」『平安宮成立史の研究』塙書房1995年
- 山村信榮「大宰府成立論－政庁第Ⅱ期における大宰府の成立」『牟田雄二君追悼論集』同刊行会1994年
- 石見清裕『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院1998年
- 森公章「大宰府および到着地の外交機能」『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館1998年
- 澤村仁「大宰府政庁の官衙」『太宰府市史 建築美術工芸資料編』太宰府市 1998年
- 千葉孝弥・武田健市・鈴木孝行『市川橋遺跡－第23・24次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第55集 多賀城市教育委員会 1999年
- 『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第67集 多賀城市教育委員会 2002年
- 井上信正「大宰府条坊区画の成立」『考古学ジャーナル』No.588ニューサイエンス社 2009年
- 井上信正「大宰府朱雀大路沿いの大型建物群と出土品」『都府楼』第42号 (財) 古都大宰府保存協会 2010年
- 井上信正「大宰府周辺の大型建物について」第162回九州古文化研究会～最近の大型建物遺跡調査例とその性格 発表原稿 2012年
- 鈴木琢郎「蝦夷の朝貢・饗給と多賀城－南北大路隣接地の大型建物群の理解をめぐって－」『福大史学』82 福島大学史学会 2013年
- 井上信正『大宰府条坊跡44－推定客館跡の調査概要報告書』太宰府市の文化財第122集 太宰府市教育委員会 2014年
- 井上信正「大宰府」『古代の都市と条里』条里制・古代都市研究会編 吉川弘文館 2015年
- 鈴木拓也「多賀城」『古代の都市と条里』条里制・古代都市研究会編 吉川弘文館 2015年
- 小鹿野亮「古代大宰府への道」『海路』第12号 海鳥社 2015年
- 菅波正人「鴻臚館への道」『海路』第12号 海鳥社 2015年

古代都市・大宰府の中央、朱雀大路^{すざくおおじ}に面した場所（西鉄二日市駅北側）で南北に連なる大型の建物跡が、大宰府市教育委員会による発掘調査で確認された。外国使節を迎えた『客館』^{きやくかん}とみられる本遺跡^{ほんいしき}の発見は、大宰府の歴史に新たな光をもたらすことになった。本遺跡の重要性は高く評価され、平成26年10月6日に「特別史跡 大宰府跡」に追加指定された。

トピック展示「新羅王子がみた大宰府」では、奈良時代の天平勝宝4年(752)に来日した新羅王子・金泰廉^{きんたいれん}の目線で古代都市の姿を描き、現代の町並みと重なる歴史を視覚的に認識させることに重点を置いた。

下記の復元イラストは、大宰府市教育委員会の井上信正が作画した原案を基に、イラストレーターの毛利清隆がイラスト化したものである。写真手前の調査地が推定客館跡の北側で、古代都市・大宰府の上に現在の太宰府市が重なっている。復元イラストは、写真をもとに九州歴史資料館や大宰府市教育委員会の調査・研究成果を加えて描かれた。

(小嶋 篤)



奈良時代の大宰府（毛利清隆、井上信正（監修））



現代の太宰府

※イラストと画像は、大宰府市教育委員会所蔵

第3章

輸入陶磁器と喫茶文化

井上 信正

1. 国際交流の最先端「客館」

大宰府条坊内の客館跡では、佐波理・新羅土器など新羅製品が注目を集めたが、日本の漆皿・奈良三彩壺・銅製容器、また唐の白磁・青磁といった、各国を代表する高級品がそろって出土している。

その希少性は、比較的出土例が多い唐の陶磁でさえ、京や大宰府といった大都市をのぞくと官衙・寺院・館など限られた場所でしか出土しないことからもうかがえる。大宰府でもその種類は碗・皿が中心となるが、客館跡ではさらに、壺・水注^{すいちゅう}・香炉^{こうろ}・合子^{ごうす}・托^{たく}・唾壺^{だこ}などが出土した。これほど多様な品が複数出土するのは政庁周辺や観世音寺などに限られており、ここが大宰府でも特別な場所だったことを物語っている。これらは外国使節が滞在する館でのもてなしの用具、あるいは交易品だろう。

こうした、「客館」に彩りを添えるこうした品々の中に、8世紀に唐で広まった喫茶の器なども含まれている。火舎^{かしや}や越州窯青磁（秘色青磁）の茶碗など、喫茶を推測させる用具の出土は、ここが国際的な文化・交流の最先端にあったことを伝えている。



さまざまな種類の越州窯青磁
客館跡（特別史跡 大宰府跡）出土 8世紀末～9世紀前半

2. 唐からもたらされた陶磁器

唐代の陶磁器は、高級品として珍重された。

なかでも白磁（邢窯）は希少で、青磁ほど多くは伝わっていない。大宰府でも出土例はあるが数は非常に少ないという状況に変わりはない。客館跡では現在確認できているのは碗・皿のみだが、その量は

大宰府条坊内においても比較的多い傾向にある。

唐の青磁には「秘色」と呼ばれ珍重された越州窯青磁（浙江産）や、西域風のデザインをもつ長沙窯青磁（湖南産）などがある。古代日本にも高級品としてもたらされ、官衙・館・寺院など特別な場所で使われた。越州窯青磁は、日本でも「秘色（ひそく）」と呼ばれ、緑釉陶器など国産の食器がその形を模倣したことが知られている。



邢窯白磁（碗の破片）
客館跡（特別史跡 大宰府跡）出土
8世紀末?～9世紀前半



長沙窯青磁（水注・壺の破片）
客館跡（特別史跡 大宰府跡）出土
8世紀末～9世紀前半



越州窯青磁（皿・浅形碗）
客館跡（特別史跡 大宰府跡）出土
8世紀末～9世紀前半



茶碗・茶托（越州窯青磁）
客館跡（特別史跡 大宰府跡）出土
8世紀末～9世紀前半
※写真の茶托は復元品だが、同じものが客館跡から出土している。



唐からもたらされた陶磁器は、日本の食文化にも大きな影響を与えたといえよう。

3. 「越州」(秘色)の喫茶

茶は中国では古くから飲まれていたが、唐の陸羽(？-804)が記した『茶経』によって茶の知識がまとめられ、喫茶文化へと発展した。日本にも9世紀初めまでには伝えられ、僧や貴族など一部に広がったと考えられている。

『茶経』には茶道具についても詳しく記されているが、「盃」(茶碗)のうち最上とされたものが「越州」(越州窯青磁)であった。器の色が「玉」に似ており、茶の色も緑色に見えるため、「邢州」(白磁)よりも優れていると、陸羽は記している。

客館跡からは、越州窯青磁の茶托^{ちやたく}4点、茶托とセットになると考えられる小椀などが出土した。国際交流の最前線であるこうした場所に、唐の喫茶文化すなわち国際文化の最先端がいち早くもたらされたことがうかがえる。



火舎(右:須恵器、左:奈良三彩)
客館跡(特別史跡 大宰府跡)出土 8世紀



奈良三彩火舎の類例
(京都府木津川市・馬場南遺跡出土)
写真提供:公益財団法人京都府埋蔵文化財
調査研究センター

4. 火舎^{かしや}

火舎は、大きな皿^{じゅうきやく}に獣脚がつく火を入れる容器で、寒い時に暖をとる手あぶり、香炉などの用途がある。須恵器火舎は、大宰府ではあまり出土例がなかったが客館跡では数多く出土した。直径が30cm以上となる大型のものが多く、皿の側面に透かし穴を入れたものもある。

写真の奈良三彩火舎は、皿の体部破片である。釉薬^{うわぐすり}の剥離が進んでいるが、緑・茶色の鮮やかな釉が当初の面影をのこしている。客館跡の隣接地から出土したもので、奈良三彩火舎は大宰府では初の事例である。奈良三彩は、茶道具の種類がそろっていることから、唐の喫茶文化が8世紀には伝わっていたとする説がある。

陸羽の『茶経』には、茶器「風^{ふう}炉^ろ」は「三足」で「昔の鼎^{かなえ}の形のようにし」とある。おそらく火舎に似たものだろう。『茶経』が述べるような銅鉄の鑄造品ではないが、こうした火舎が喫茶で利用されたことも考えられよう。

参考文献

布目潮風・中村喬編訳『中国の茶書』東洋文庫289 平凡社1976年

巽淳一郎「日本における茶法の開始」『新版古代の日本』6（近畿Ⅱ）角川書店1991年

第4章

大宰府出土の響銅

井上 信正

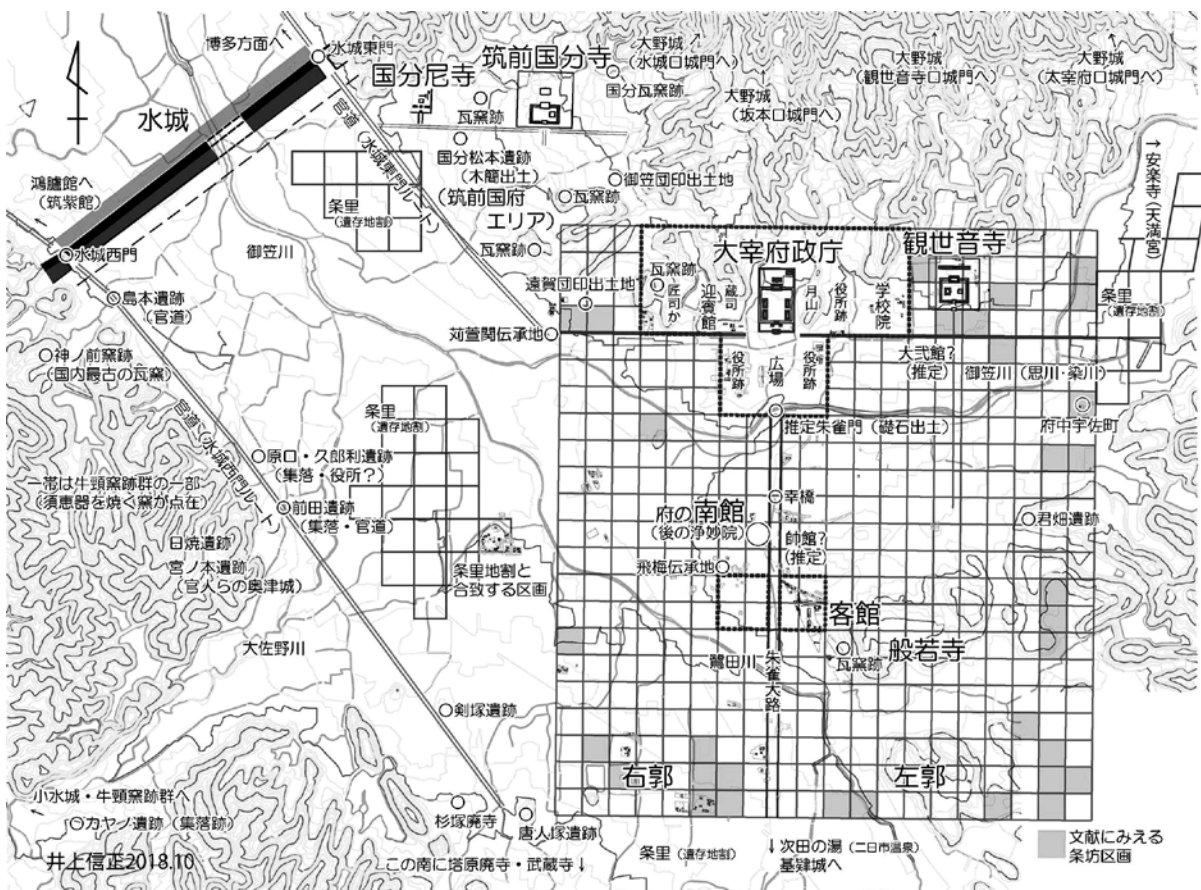
7世紀中葉から8世紀初頭は、激動する東アジア情勢・国内情勢を踏まえ、東アジアと向き合う国家づくりがなされた時代である。大陸・半島に近い北部九州・太宰府地域でもこれに呼応して、親百済の施策を行った天智朝には百済系の要塞群が築かれ、中国・唐を意識した制度設計や藤原京を設けた天武・持統朝には条坊都市が整備され、そして8世紀に入り現在知られる政庁域などが設けられている。

白村江での敗戦から40年後の703年、唐との国交樹立を目指す遣唐使の一行が皇帝・武則天を拝謁した。この使節団には遣唐大使と別に、天皇からの大権委任を意味する節刀を授けられた執節使・粟田真人が同行していたが、皇帝は彼をたいそう気に入り厚遇したことを歴史書『旧唐書』が伝えている。この粟田真人は大宝律令の編纂にも関わった人物だが、680年代は筑紫大宰の帥（長官）としてこの地に赴任し、新羅使の応対や大宰府条坊造営にも関わっていた。704年に帰国した彼らがもたらした情報で、朝廷はさらに改革を進め、和銅元（708）年正月に詔を発し、唐の都長安に似た北を上位とする平城京を造営したと評価されている。その和銅元年三月、粟田真人は中納言のまま帥に任命され再び大宰府に赴任した。この後大宰府の再整備が本格化し、政庁や朱雀大路が備えられた（筆者は718年完成説を支持する）。こうした経緯を経て、大宰府の街は世界の宮都と共通する要素を備えた本格的な都市となったのである。

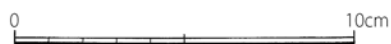
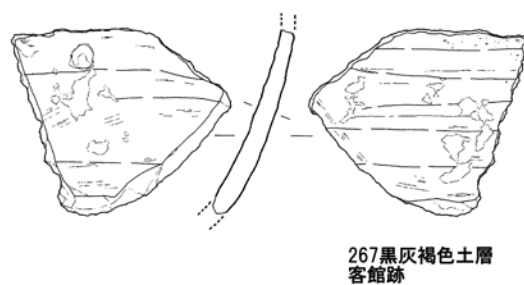
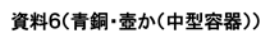
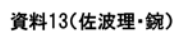
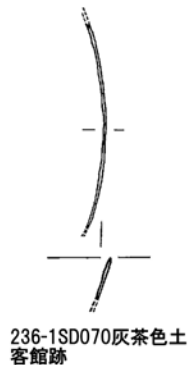
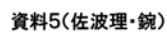
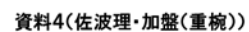
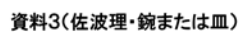
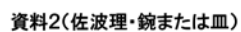
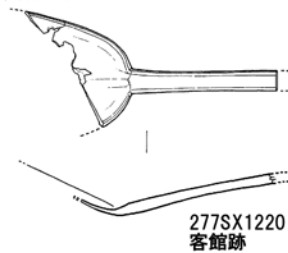
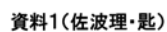
日本はその後も唐・新羅に使節を派遣し、また外国使節を受け入れ、東アジア世界と関わりをもちつつ、その接点となる国内での外交の場も整えていった。それを示す遺跡が見つかった。2012年、西鉄二日市駅北側（朱雀大路東側）で条坊跡の調査を進めていた太宰府市教育委員会は、奈良時代の大型南北建物2棟を含む建物群や当時的高级品出土が相次ぐこの遺跡を外国使節が滞在した大宰府条坊内の客館跡と公表し、国も2015年10月に特別史跡大宰府跡に追加指定した。中国でも京内客館は概ね朱雀大路沿いにあり、日本でも平安京の七条の朱雀大路に面した東西に鴻臚館が置かれたことが知られている。京内客館の遺跡調査例はほとんどないが、唐の賓礼研究から復元された客館構造と大宰府客館跡の施設配置は類似点が多い。当時の国際標準ルール（唐の賓礼）に基づく外国使節の受け入れを行う場合、礼制、施設、都市などを整える必要があり、それが8世紀の大宰府再整備を行う際の基本理念の柱の一つであったと考える。

さて、大宰府の職掌には外国使節の「饗讌」（饗宴）が律令で規定されている。他例を参考にすると正式な饗宴は政庁付近（西側丘陵上の大型建物と推定）であり、客館で行われた可能性は低い。ただ客館での豪華なもてなしが、数々の高級品・特殊品の出土で明らかとなった。注目するのが新羅の製品とされる高錫青銅食器・佐波理である。匙1点、碗皿類4点の出土は、客館推定へのきっかけともなったが、この素材分析を九州国立博物館で行い（別表参照）、類例調査を多くの佐波理を所蔵する宮内庁正倉院事務所等で行った。素材分析は地金ではなく鍔の分析であり、また錫は鍔に溶出しやすい性質があるため数値は本来の成分比を示すものではないが、かなり高い値で錫が含まれており、佐波理と判断される。またこのとき、市が保管する出土金属製品の一部を分析にかけたところ、新たに佐波理と判明したものがあつた。このうち朱雀大路東側溝から出土した資料13（9世紀中～後葉以前）は、形態が類似する資料5（客館出土佐波理碗）の時期推定を補強し、客館の時期推定にも寄与している。

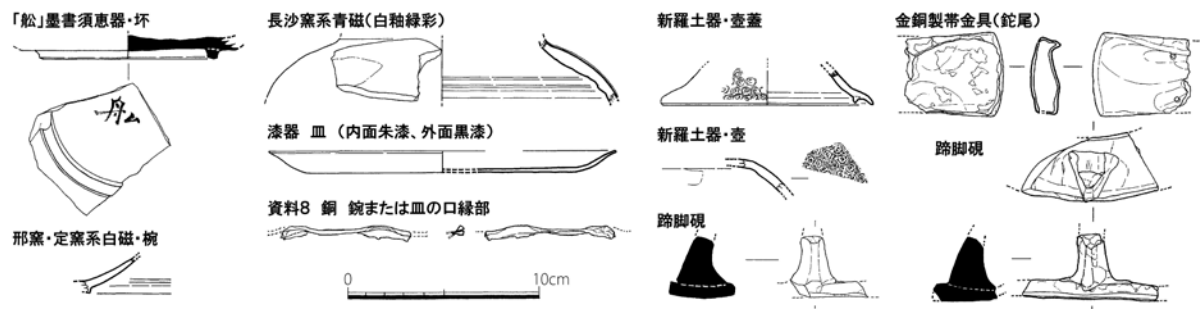
大宰府条坊の利用実態を示す記録がほとんどない中、佐波理の出土をきっかけに歴史の断片がつながり、汎東アジア的な古代都市構造の解明や、外交舞台の解明に寄与する成果となっている。



《大宰府条坊图》



《客館跡および条坊跡出土金属製品》



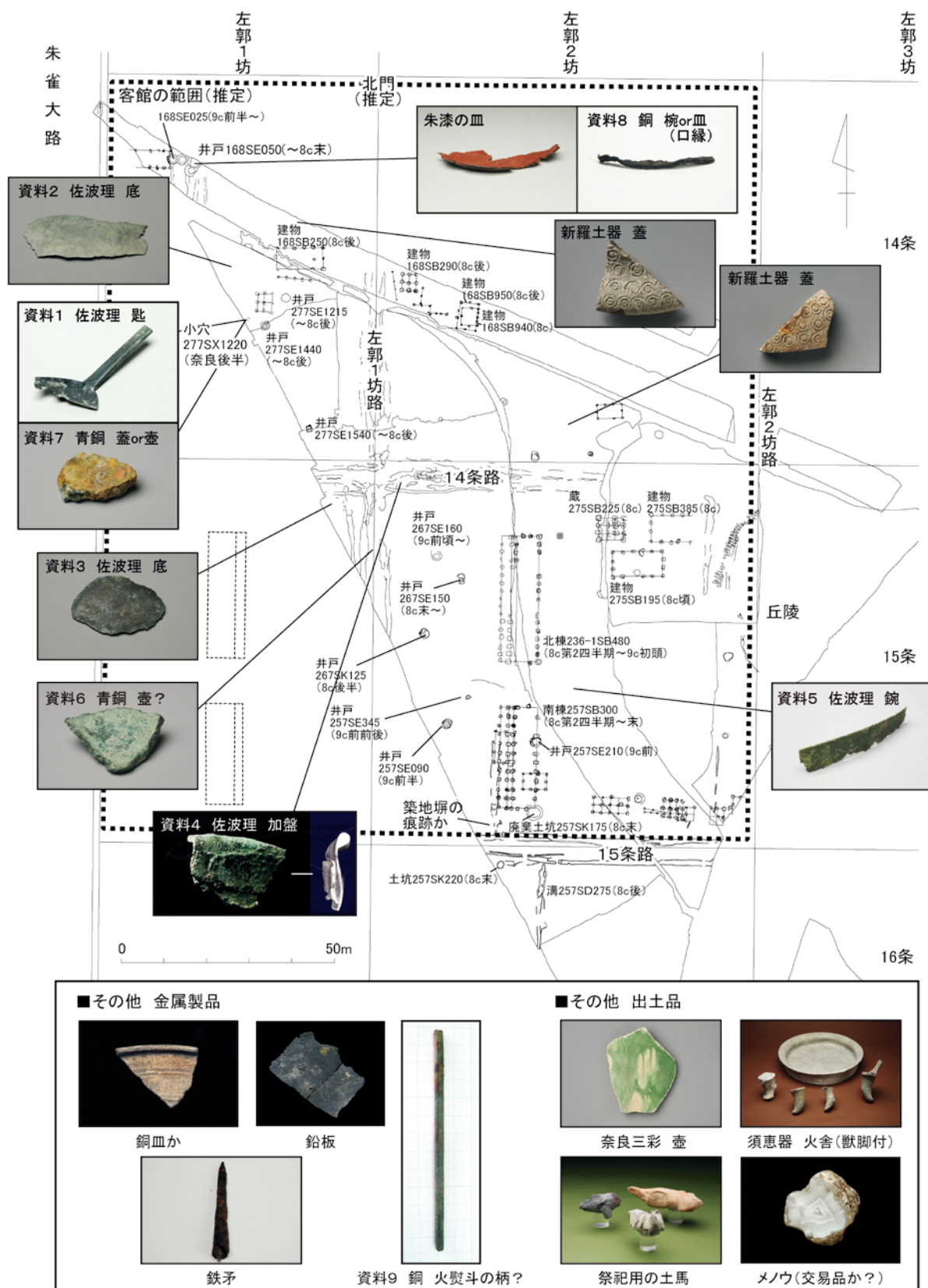
《その他の客館跡出土品》

	器 種	残存部	遺 物 推定制作時期	計測部位 分析結果	備 考	遺跡・次数 遺構名 遺構種別	遺 構 埋没時期
客館跡							
1	高錫青銅(佐波理) 匙	柄・受け	奈良(8c) (遺構の時期より)	匙面中央 Sn71.63%、Cu24.9%、 Ag1.62%、Fe1.85%	正倉院新羅招来品に類例あり。なお、正倉院の匙よりも本製品の方が制作が優良との指摘あり(正倉院事務所西川明彦氏ご教示)。	条277 SX1220 小穴	奈良後半
2	高錫青銅(佐波理) 鏡または皿	底	奈良(8c) (客館の時期を参考)	中央 Sn45.1%、Cu54.22%、 Pb0.24%、Fe0.45%	正倉院佐波理同様、デントライト(樹枝状痕跡)が見られる。なお、正倉院の皿底は少し厚みがあるが(上記、西川氏ご教示)、これは薄底である。	条277 SE010黒色土 井戸	平安後期
3	高錫青銅(佐波理) 鏡または皿	底	奈良(8c) (客館の時期を参考)	内面中央 Sn38%、Cu57%、Fe2%、 Pb2.5%、Ag1%以下		条267 SE001黒色土 井戸	11c中葉?
4	高錫青銅(佐波理) 加盤	口縁	奈良(8c) (客館の時期を参考)	中央 Sn13.72%、Cu85.34%、 Fe0.94%		条267 SF785 14条路路面下層	9c中～後葉
5	高錫青銅(佐波理) 鏡	口縁	平安(9c) (口縁形態、錆色より)	内面中央 Sn86%、Cu7%、Fe7%	遺物時期は、奈良県立橿原考古学研究所小栗明彦氏より類例のご教示を頂く。これは、資料13の出土遺構時期とも合致する。	条236-1 SD070灰茶土 溝	平安後期
6	青銅 壺? (中型の容器)	胴部	—	中央 Sn15.83%、Cu45.61%、 Ag1.41%、Fe1.67%、 Pb26.71%		条267 黒灰褐土層 整地層	平安後期
7	青銅 蓋または壺	破片 壺なら肩部	奈良(8c) (遺構の時期より)	内面中央 Cu83%、Fe13%、Sn3%、 Ag・Pb1%以下	佐波理匙と同遺構から出土。	条277 SX1220 小穴	奈良
8	銅 碗×皿	口縁	奈良(8c) (遺構の時期より)	中央 Cu94%、Fe6%		条168 SE050灰黄粘 井戸	奈良末
9	銅 棒状製品	片	—	中央 Cu99%、Fe・Pb1%以下	火熨斗の柄(組合せの角部)?との意見もある。	条236-1 灰茶土層 整地層	平安後期
10	銅 製品の一部	リベット接 合部	—	内面中央 Cu98%、Fe0.5%	火熨斗の柄取付部、皮製品等の金 属取付部、等の意見もある。	条267 SF715 14条路路面上層	9c末～10c初
11	鉄 盤	皿部破片	—	内面中央 Fe100%	大型容器の一部とみられる。	条267 茶褐土層 整地層	平安後期
12	不明(鉛・鈴・アンチモン) 鏡か	口縁	—	内面中央 Pb58%、Sn24%、Sb13%、 Fe4%、Cu1%		条277 黒茶土層 整地層(左郭一坊路 上)	平安後期
客館北側(朱雀大路沿い)							
13	高錫青銅(佐波理) 鏡	口縁	平安(9c) (口縁形態より)	内面中央 Sn72%、Cu18%、Fe8%、 Pb1%、Ag1%以下	資料5と類似。	条64 SD110 朱雀大路東側溝	9c中～後葉
14	不明(銅と鉛) 火熨斗	口縁	平安	内面鐫中央 Cu43%、Pb56%、 Fe0.5%		条170 S-33黄灰土 土坑か	10c以降
15	青銅 火熨斗	体部	平安	内面体部中央 Cu22%、Pb40%、 Sn29%、Fe7%		条170 S-7黒灰土	—
その他							
16	高錫青銅(佐波理) 鏡	口縁	平安 (口縁形態より)	内面中央 Sn51%、Cu40%、Fe4%、 Pb5%		条88 SX116 小穴	中世
17	高錫青銅(佐波理) 小鏡	口縁	—	外面中央 Sn80%、Cu5%、Fe10%、 Pb4%		条88 SD294 大溝か	12c末 ～13c初頭

◎ 客館跡出土品その他の金属製品の素材分析を、平成22(2010)7月に九州国立博物館にて、蛍光X線回折により実施。分析には鳥越俊行氏の協力を得た。

◎ 銅に覆われた表面の分析で、分析結果は素材の組成を示すものではない。錫(Sn)は湧出しやすい元素だが、極めて高値のものは素材の錫含有量が多いこと示唆している。

《金属製品分析一覧》



《客館跡主要遺構配置図、および金属製品ほか遺物出土状況》

第5章

響銅でつながる大宰府と東アジア

川村 佳男

はじめに

「西の都」と謳われた大宰府には朝鮮半島や中国大陆からさまざまな人・モノ・情報がもたらされた。そのなかには響銅の器物（以後、「響銅」と記す）も含まれる。本稿では大宰府を含む響銅の国内外の出土地点を概観するとともに、東アジアにおける響銅の広がりを捉える。そのうえで、響銅の用途に着目しながら、響銅を用いることの意味を読みとく。その意味に迫ることができれば、大宰府において響銅を必要とした理由がより鮮明に見えてくるだろう。

1. 響銅とは

銅に錫その他の金属を加えた合金の器物は、ひろく青銅器と呼ばれ定着している。これはもともと近代の歴史学あるいは考古学の用語であり、人類が石器時代、青銅器時代、鉄器時代という三つの時代を経て発展したとする三時代区分法の概念とともに広まったと考えられる。言い方を替えれば、いわゆる青銅器は地域や時代ごとに、とりわけ近代以前においては、さまざまな呼び方がなされていた。響銅もまた青銅器を表す呼称のひとつである。

しかし、響銅がこんにちの青銅器のように青銅製の器物全般を指すわけではない。響銅は近世以来中国で用いられた言葉で、打つとよく響く澄んだ音を出すという性質に由来している。『箋注倭名類聚鈔』にある「佐波利（さはり）」や買新羅物解の「迺羅（そうら）」は「鈔羅（そうら）」という中国の青銅製打楽器に由来する名称と考えられ、やはり打つとよく響く音を出す青銅の材質の一種を表すものとされている。このような性質をもつ青銅器は蠟型鑄造後に轆轤で回転する器面を削ったり、板金を加熱しながら鎚で敲いて成形する鎚鑄という技法で通常作られている。また、響銅は表面の成分を分析すると、青銅のなかでも錫を20パーセント前後と比較的多く検出する傾向が認められるという研究もある。これらの製作技法、ないしは一定の錫の含有率ゆえに、打つと音がよく響くという性質が得られるのか、因果関係は必ずしも十分に明らかにされたとは言いがたい。



図1 八重鏡 奈良時代・8世紀
東京国立博物館所蔵（法隆寺献納宝物）

とはいえ、少なくとも轆轤挽きや鎚鑄によって製作された痕跡をもつか、これらの技法による製作が適切な器形、たとえば轆轤挽きなら円形や楕円形を呈する青銅器が響銅であると視覚的に認定されている。このような技法で製作された響銅は、比較的薄造りで手取りの軽いものが多く、器表は無文か、せいぜい弦文をめぐらせる程度の簡易なものが大部分を占める（図1）。複雑な文様をもつ例もまれに存在するが、器体が薄いため、その場合も蹴り彫りで浅く彫り表すのが常である。打つと音がよく響く

という響銅の第一義的な性質は、寺院の伝世品や保存状態のよほど良好な出土品に限り、確かめることができる。

2. 響銅の広がり

東アジアにおける響銅の初出は中国に求めることができる。上限時期を何世紀まで遡らせるかは、響銅の定義の仕方によって変わってくる。たとえば、上述した鎚鑠という技法や鑄造後の青銅器の器表を削る技法だけを見れば、紀元前5～前3世紀の戦国時代には確実に存在する。しかし、轆轤挽きによって器表を削った明瞭な痕跡をもつ例は、管見の限り、西暦6世紀の南北朝時代まで下る可能性がある。このように轆轤挽きの開始だけやや遅れる可能性があるものの、響銅の基本的な器種の組成、つまり、鉢（碗）・承盤・鏃斗・匙などから構成されるセットに注目すると、遅くとも西暦5世紀には成立している。目下、中国における響銅の本格的な出現時期は5世紀ないしそれ以前、とするのが穏当な言い方である。

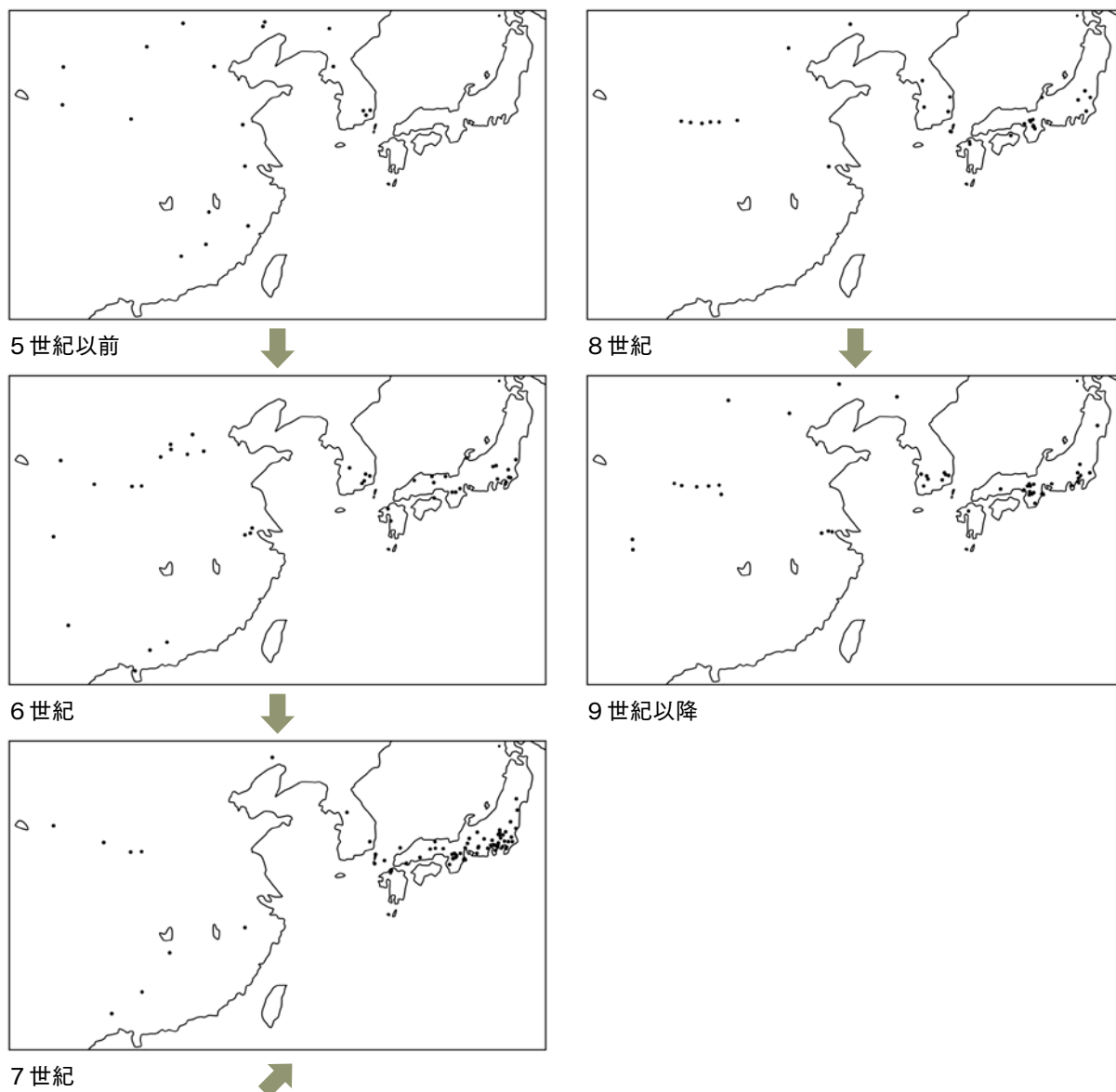


図2 東アジアにおける響銅のおもな出土地（もしくは伝世地）とその変遷

中国における響銅のおもな出土地に着目すると、5世紀以前は黄河流域のいわゆる中原に集中するのではなく、北方の草原地帯から長江流域以南にかけて広く散在していることが分かる(図2)。6世紀の南北朝時代には、南朝の中心地である南京およびその周辺のほかに、山西省・河北省など北朝の重要拠点からの出土が顕著である。北朝は鮮卑が支配したいわゆる征服王朝であり、草原の道を経てササン朝やビザンティン帝国とも交流があった。5、6世紀における響銅の出土地に見られる傾向は、中国の響銅が既存の青銅器から独自に内的な発展を遂げたものではなく、西アジア・中央アジアから伝播したとするこんにちの一般的な考え方の妥当性を示唆するように映る。しかし、西アジアから中国にいたる響銅の具体的な伝播経路はなお不明であり、その究明は今後の課題である。7世紀以降の遺跡では唐王朝の首都だった西安近辺、副都の洛陽近辺、ならびに水運の要衝・揚州近辺などから響銅が継続的に出土している。

朝鮮半島に目を移すと、5世紀に早くも高句麗は響銅を受け入れていたことが知られる。隣接する遼寧省北票からは響銅が早くからまとまって出土しており、そこから高句麗へ伝わったことが推測される。そのほか、半島東南部の辰韓や弁韓と呼ばれた地域からも響銅が出土している。どのような経路で伝わったものかは不明ながら、6世紀に日本で出現する響銅との関連が注目される。6世紀以降の出土例は半島の南半分に集中している。とくに10世紀の高麗になると、響銅は工芸がさらに発達し、これまでに出土した量から推して、数量の面でもより多く製作されたようである。

日本の響銅は、佐賀県唐津市島田塚古墳や熊本県宇城市国超古墳など九州から出土した例に6世紀のなかでも比較的古いものがあり、最初期に相当するものと考えられる。その後、7世紀にかけて、大和王権の中核があった近畿、水陸交通の要地のほか、とりわけ関東地方に出土地が集中する。8世紀になると、出土地は近畿、および大宰府などの地方でもとくに重要な政治的拠点のあった場所に絞られていく。9世紀以降はそれまでの政治的な拠点に加えて、和歌山県的那智、伊豆の修善寺、岩手県の中尊寺などの宗教的聖地からの出土が目立って増える。

3. 響銅の用途—東アジアに共通する聖俗両用の宝器—

中国における響銅の成立時期を西暦5世紀に求めるとすれば、先述した通り、鏡・承盤・鏝斗・匙などの器種組成の確立をその根拠のひとつとして挙げることができる(図3)。言うまでもなく、これは食器としてのセットである。その後、水瓶や箸などもこのセットに加わっていく。

漢時代において、高級な食器のセットは漆器であった。5、6世紀の南北朝時代になって、鍔鏝や轆轤挽きなどを駆使して製作した金属製の食器セットが漆器に取って代わった。もっとも高級なものは銀器であり、とくに唐時代にいたって目覚ましい発達を遂げたが、響銅はそれに次ぐ高級な食器のセットとして長く珍重された。

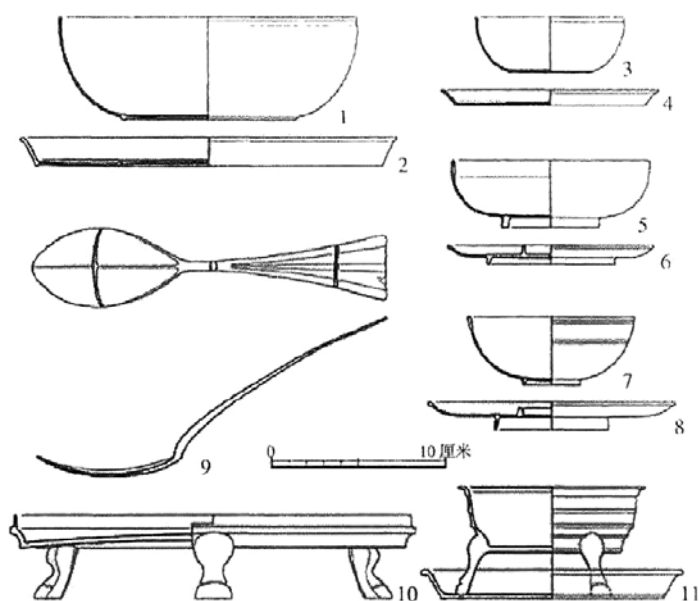


図3 江蘇省句春で一括出土した響銅の容器
(鎮江博物館他「江蘇句春城南朝元嘉十六年墓」『東南文化』2010年第3期より引用)

5、6世紀は仏教が中国で定着し、初めて隆盛した時期でもあった。これにともない、仏像や仏教儀礼にかかる空間を当時の人々にとっての最高級のもので飾りつける「荘厳」の風習も普及していった。仏像への供物を最高級の食器セットである響銅に盛ろうと考えたのは、至極当然の発想だったと言える。こうして響銅は仏具のなかにも取り入れられ、柄香炉のように俗生活よりも、むしろおもに仏教儀礼に使用されたと考えられる器種も響銅のなかに含まれていった。また、水瓶のように、観音菩薩の持物として仏像表現のなかに組みこまれた響銅まであった。そもそも響銅は仏教と始めからセットで中国に伝来した、という指摘もある。仏教が先か、響銅が先か、前後関係をただちに証明することは難しい。ただ、少なくとも中国では王侯貴族の華やかな日常生活と仏教の荘厳という聖俗両面において響銅が重用されたことに疑いはない。この両面性は響銅が朝鮮半島や日本に伝播したとき、響銅そのものと同時であったかは分からないが、それでも最終的には伝わった。その様子は響銅が寺院跡からも古墳からも出土する6、7世紀の日本でもうかがえる。もっとも古墳被葬者にしてみれば、仏教の情報をどれほど知っていたのか分からない。もっぱら世俗面での宝器性が強調されたか、既存のマツリに用いる新しい道具として響銅を古墳に副葬したのかも知れない。

4. まとめ

器皿・杯・匙・箸はもちろん、それらを載せる盆まで金色に光輝くセットで銘々に食事が運ばれて来る光景は、古代の日本人にとって衝撃だったに違いない。しかし、響銅を使った新しい食文化は、仏教とならんで、唐や新羅といった東アジアの国々と交流するうえで欠かすことのできない重要なファクターのひとつだった。礼を失することのないよう、また、侮られることのないよう、当時の東アジアにおける通有の慣習や儀礼にのっとり、外国の使節団を応接する大宰府でも響銅が必要とされた。客館跡という同一の遺構から、匙と加盤が出土したことは、これらがもともと食器のセットとして保管・使用していた可能性を示唆する。発掘の進展により、今後さらに多くの響銅が大宰府史跡で発見されることだろう。



図4 重要文化財 十一面観音龕と持物の水瓶
(赤丸の囲い) 東京国立博物館所蔵

第6章

現代の鑄金作家からみた極薄青銅器

—響銅製作技術解明の予察として

赤沼 潔

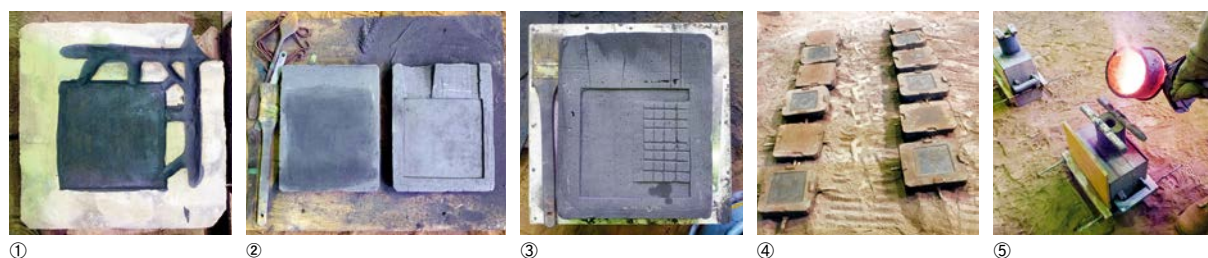
極薄青銅器の鑄造実験と、響銅の製作を2013年から実施した。その製作記録をまとめた。

普段は、美術系の鑄物の作品制作を実施しており、鑄物の厚みも3mm前後での鑄造が多いが、極薄青銅器の再現鑄造のために薄い鑄物の製作を試みた。また、響銅に関しても錫(Sn)の含有量が高い銅合金を用いて鑄造と鍛造を繰り返し展開した内容を報告する。

1. 古代中国紀元前5世紀の極薄青銅器の製作技術の解明を目的としての鑄造実験

厚さ1mmに満たない青銅製容器が、戦国時代(前5世紀)以降の中国で急速に普及したが、この極薄青銅製容器の製作を可能にした技術について鑄造実験を通して検証した。実施した内容は、鑄型の種類、鑄造法案、合金熔解、金属加工等当時と現代の状況も加味して行った。

鑄型については、真土(まね; 鑄型用の土)を用いて補強材を入れない鑄型①、粘土に炭粉を加えた補強材を入れない鑄型②、型枠を陶土で素焼して補強材とし、その内側に真土を使用した鑄型③、筋金で補強を加えた真土の鑄型④、生型鑄造法の鑄型⑤で実施した。



①については、鑄造性は良かったものの鑄型自体が脆く、安定して実施することは困難であった。②は粘土質が焼結して強度は出るが、最初の成型性に問題が多く時間がかかりすぎる欠陥があった。③は①の型に枠で強度を持たせたものであるが、鑄型成型時はやり易さもあったが、焼成段階で鑄型の収縮のため中央部に亀裂が入り補修が多く必要であり、多数製作するには適していなかった。④は現代でも使用している筋金の補強を入れた真土の鑄型である。全体的に優れており安定して良好な鑄造ができるが、鑄型の成型、焼成に時間がかかる。⑤は生型鑄造で短期間に鑄型ができ、ある程度鑄物の成功率も高い鑄型である。今回は多くの種類の合金を鑄造する必要があり、⑤の鑄造法で実施した。

鑄造した枚数は100枚以上になり、合金(Cu, Sn, Pb)の種類は錫の含有量が多いものが多く30種類近くに及んだ。また、鑄造の肉厚は困難であったが1mm厚を基本として実施した。



合金地金

①の結果

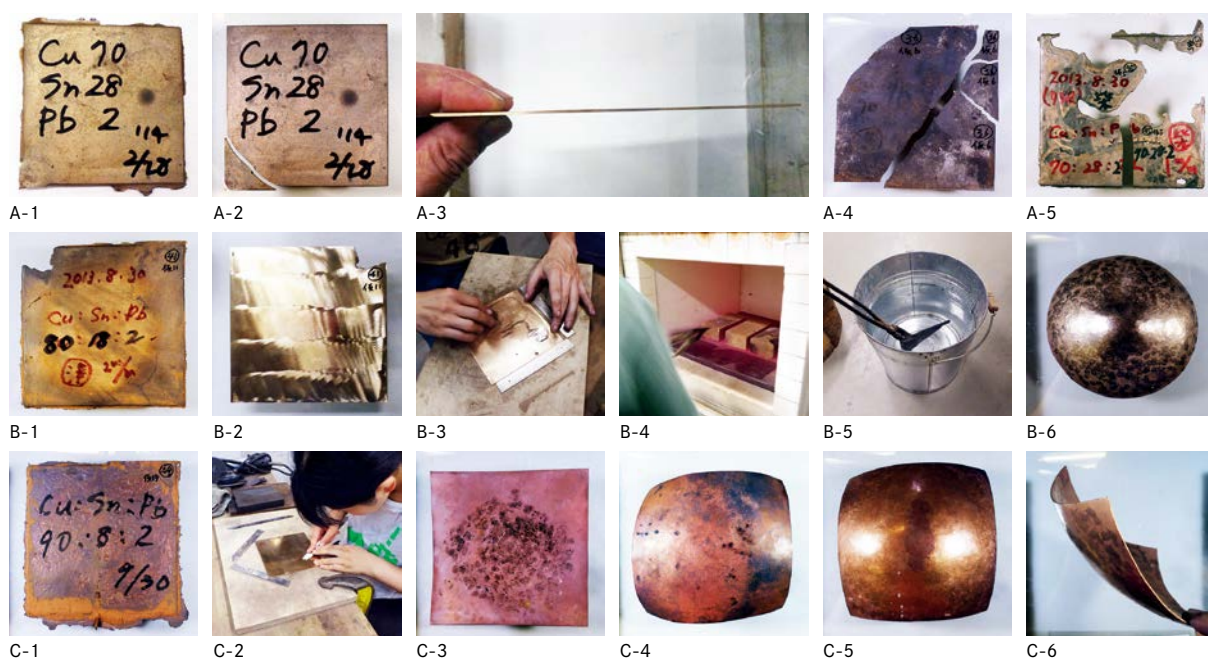
②の結果

⑤の結果

肉厚については、2mmで実施した場合は、ほとんど鑄造は成功したが、1mmでの鑄造は5割以上失敗

で、湯（溶けた金属）が流れ切らず、穴が開いたり、半分しか流れない状況であった。それでもそれぞれの異なった合金で最低1枚以上は欠損のない鋳物を製作した。また①～④までの鋳型は鋳型を焼成して、型が熱いうちに鋳造するので湯流れは良かったが、⑤の場合は鋳型の温度は常温で、鋳型の粘性を出すために多少の水分があるため、湯の流動性は悪くなり、1mm厚では失敗する確率も高いが、湯の圧力がかかり勢いよく流れる法案で鋳造を実施し、ある程度は欠損のない鋳物ができた。

対象とした古代中国の極薄青銅器は器の縁の部分1mm以上あるが、底部は1mmを切っているところもある。内側には線刻された文様があるものもある。外側はヤスリ等による擦過痕が見受けられ、内側はキサゲ（金属を削る道具）等で鋳肌を削ぎ落とし、滑らかな面を作り上げてから線刻しているように見える。線刻の線はかなり細くケガキ状のもので引っ搔いて作った線のように見受けられる。外側のヤスリ跡から、ある程度の厚みを持った鋳物を削って1mm以内の厚みにしていると思える。底部は、一部穴が開いており、そこから見える厚みは0.5mmを切っている。またその底部の穴の破れ方が、鍛金加工（金槌状のもので金属を叩いて成型する技法）のような形状を感じさせられる。これは、器の底部近辺を金槌状のもので叩いて成型し、極薄の器を製作したものと思われるが、同時に叩くことによって薄くてもある程度の強度を獲得でき、実用に耐えられるものにしたと思われる。このことから、1mmで鋳造した鋳物の板をより薄くするために研磨し、1mm以下としてそこから高錫青銅が破れにくくなるように650℃以上で熱処理してから急冷し、焼き鈍しをした。その板を今度は金槌で鍛造し器状の丸みを与えるところまで実施した。



A-1は、(Cu70,Sn28,Pb2)の合金で、錫の含有量が一番多い。これは鋳造して湯道を落としたもの。その後は表面にサンドブラストをかけ酸化膜を落とし、縁を綺麗にしたところで亀裂(A-2)が入った。錫の含有量が多いほど脆くなり、少しの刺激で割れが入りやすい状態になる。A-3は鋳造実験の鋳物の厚みを見ているところで、鋳造時ではほぼ1mm厚にしている。A-4は、A-2を焼き鈍すために650℃で加熱し急冷したものであるが、あまりうまくいかず割れが拡大してしまった。

A-5は、鋳造時に湯が流れ切らなかったもの。1mm厚での鋳造はこのような失敗が多い。

B-1は、(Cu80,Sn18,Pb2)の合金で、一部湯が回らないところもあったが概ね1mm厚の板状になっていたので加工を展開した。B-2は鋳肌の表面を削り落として薄くし、表面を滑らかにしたもの。B-3は、B-2をさらに細かく研磨しているところで、それを熱処理(B-4)して、急冷(B-5)し、

焼き鈍したところである。B-6はそれを鍛造加工し、器状にして成功した例。

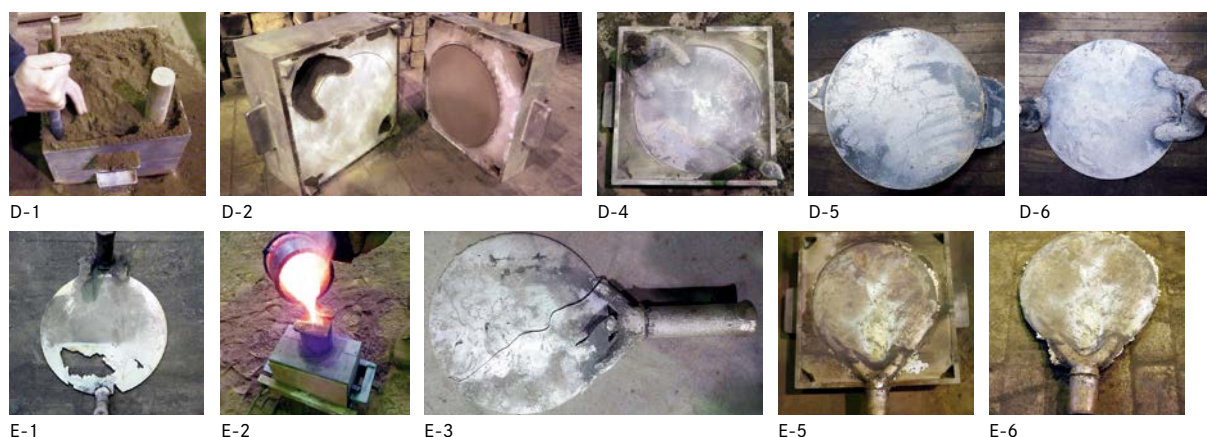
C-1は、(Cu90,Sn8,Pb2)の合金で、Bと同様に加工した。C-2は荒削りの後キサゲをかけているところ。C-3は焼き鈍しの後、鍛造加工を始めたところで、焼き鈍しが効いていることと錫の含有量が少ないためにほとんど割れは起きなかった。C-4はそれを何度か繰り返したもの。C-5は鍛造加工で表面を滑らかにし、C-6はそれを側面から見たも状態である。

このような鑄造実験と鍛造加工により、古代中国の極薄青銅器に近いものは作成できた。また、鑄造時に最終形に近い器状の形体からスタートして研磨し、鍛造加工で完成形とする方法も可能であると思える。

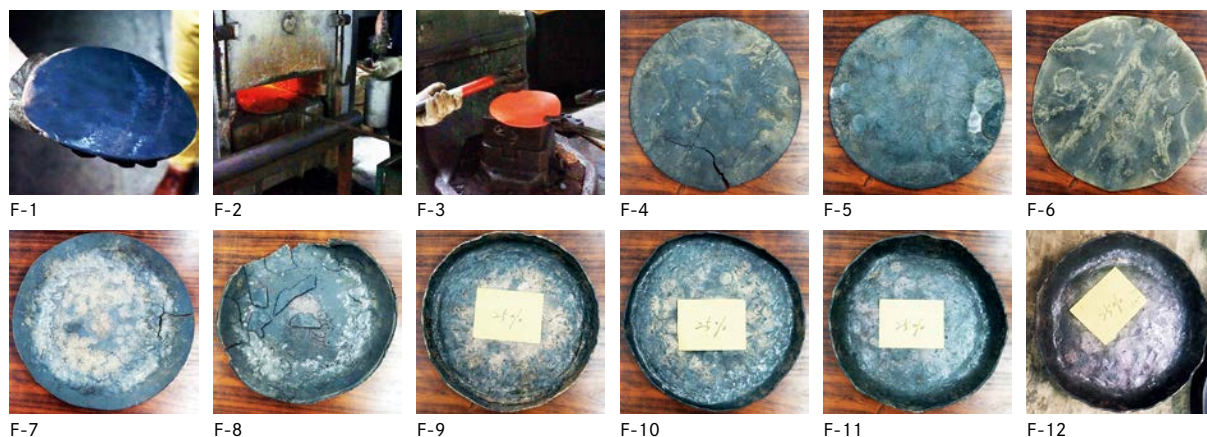
2. 響銅の製作技術解明の鑄造実験

東アジアの響銅の製作技術はどのようになっているのか鑄造実験を通して解明を計った。

合金地金は、Cu75%,Sn25%をベースとして薄板を鑄造し、熱処理を加え、鍛造で銅鑼の形状に絞り込む計画で実施に入った。鑄造法は前回の薄肉鑄造で実現可能性の高い生型鑄造法でまずは試みた。



薄肉での響銅で銅鑼を製作するためのベースとして、2mmと3mm厚で鑄造を実施した。円盤状に鑄造し、これを基本として、鍛造加工で成型していく計画での実施であった。D-1は生型鑄造法での型込めの様子で、D-2は両面の鑄型が完成したところである。これを上下に合わせて横面から鑄造する。D-3は鑄造後鑄型の片面を開いて中を確認したところで、綺麗に湯が流れていた。D-4,D-5では鑄物を型から取り出し欠陥がないことを確認した。ただし、E-1のように湯が回り切らず穴が開くことが多すぎたため、縦注ぎ(E-2)に変更した。これは鑄物部分により圧力がかかって、穴が開かないようにするための対応である。結果は良好で、E-4,E-5のように欠陥のない鑄物ができた。ただし、

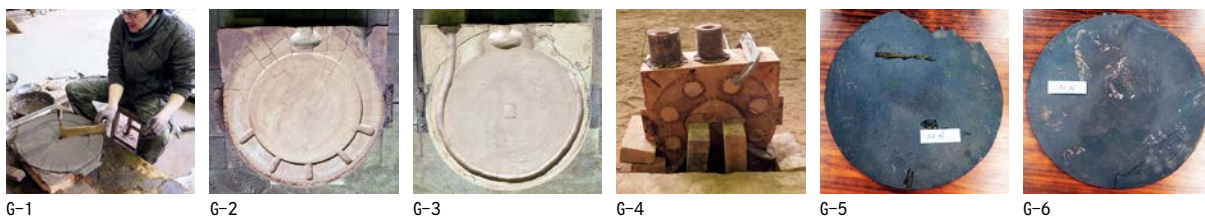


E-3のように鑄造後に亀裂が入る場面が多く、これもSnの割合が多いことにより割れやすい状況になっているためである。この後、鍛造工程に移行したが、2、3mm厚ではほとんど初期段階に割れが入り、肉厚を変更しての再スタートとなった。

熱処理の温度管理がうまくいっていないことも影響したと思えるが、肉厚を4mm、5mm、6mm、10mmで実施した。合金地金は、Cu75%,Sn25%で2、3mm厚と同様の配合であるが、かなりの高錫青銅である。

F-1は、熱処理を加え焼き鈍した状態である。それを再加熱(F-2)して熱間鍛造(F-3)で成型していく。F-4は4mm厚、F-5、F-6は6mm厚、F-7は径の大きい4mm厚であったが、いずれも鍛造の初期に割れが入った。鍛造の方法に問題があったと思われる。F-8は5mm厚で、折り曲がってきた途中で割れた。多くの枚数を鍛造した後、F-9とF-10は4mm、F-11は10mm、F-12は15mmであるが、これらについては折り曲がって立ち上がり、ほぼ完成という時に割れが入った。

他に多角的に鑄造実験を試みた。

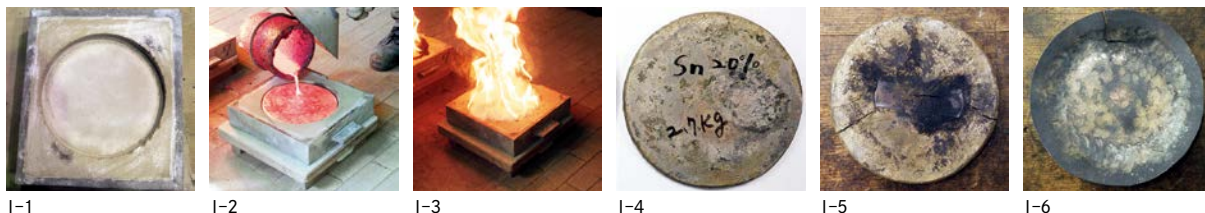


G-1は、惣型の鑄型を作っているところで、これは鏡を製作する場合の鑄造法である。G-2,3は鑄型に湯道を切っているところである。湯を下方に回し下方からゆっくりと湯を満たしていき、最後に中央上部に上げていく方法である。G-4は、注湯直前の完成した鑄型であるが、上部の2本の円筒は掛堰(かけぜき)という湯に圧力をかける方法である。鑄造は綺麗な鑄物(Cu80%,Sn20%)ができ良かったが、結果として鍛造初期に亀裂が発生し割れてしまった。



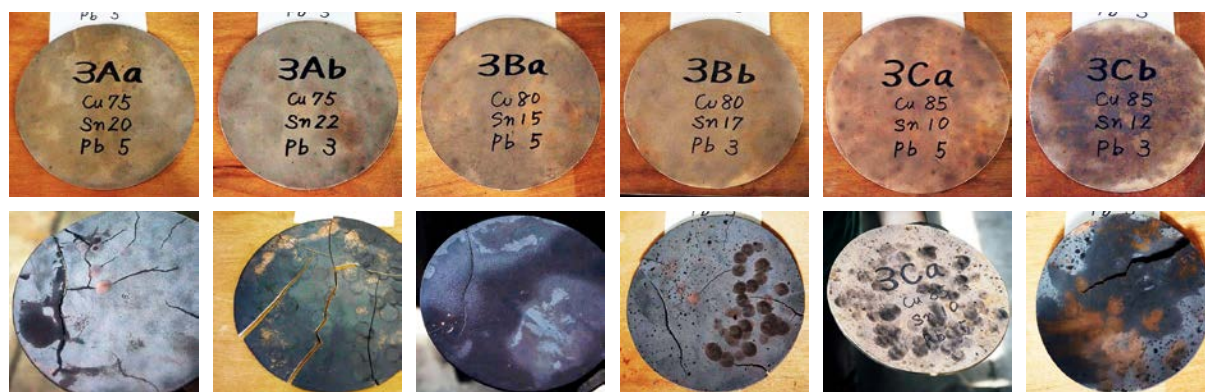
次に平板からではなく、ある程度銅鑼の形状に近づけた石膏原型から、真土込型鑄造法で型取りし鑄造した。H-1が真土込型の鑄型である。鑄型を焼成して鑄造するが、いろいろな形体に対応でき、優れた鑄造法である。今回は鑄型を簡略化させるために銅鑼の立ち上がり部分を抜け勾配にして鑄造し、鑄物になってから鍛造で内側に寄せる試みをした。結果としては、鑄造は綺麗に上がったが、やはり、鍛造処理の場面で初期に割れ(H-2,3)が入ってしまった。形体の変化で歪みがでて割れやすい状況にあったように思える。

また、韓国で製作されている銅鑼の技法を参考に実施した。



F-12でだいぶ的が絞れてきていると思えたが、厚みを多くとっての鍛造が効果的と判断し、ここでは開放吹きで10mm以上になるように鑄造した。合金は各種実施した。また金属が空気に触れている上面が荒れやすいので、注湯後素早くおが屑をかけて荒れを防止した。ただし、これも熱処理が難しく早期の割れが多く出て、良好な結果は得られなかった。

他に合金に鉛(Pb)を加えたものでも実験を試みた。



実験は全て違う比率の合金とし4,5mm厚で実施した。鑄造法は生型鑄造法を用いた。結果として熱処理時の急冷した時点での割れが多く発生し、二元合金よりも割れやすいことがわかった。鍛造でも立ち上がりまでは成型できなかった。

再現鑄造はある程度までは確認でき、合金比率と熱処理の関係が重要であることが理解でき今後の展開の予察となった。

九州国立博物館の4階にある文化交流展は、文字通り「交流」をコンセプトにした展示室である。その中でもひととき異彩を放つのが、8室に常設している「遣唐使船の交易品」である。本展示物は正倉院御物等を参考に製作した復元品と、現代でも入手できる香料や真綿等の現物で構成し、「見る」、「触る」、「匂う」という体感型の展示となっている。

当展示室では、耳も澄まして欲しい。博多湾の小波と、カモメの声も聞こえてくる。目を開けば夕闇が迫るように、照明がゆっくりと切り替わる。遣唐使が見た情景を模擬体験できることも、本展示の魅力の一つと言えよう。

(小嶋 篤)



遣唐使船が運んだ香料



博多湾に浮かぶ遣唐使船の姿（復元）